

# アイドルな彼女と声優の彼氏

飛簾

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アイドルの彼女と声優の彼氏によるイチヤイチャ日常ものです。

基本甘々な展開しかない（と思う）ので、そういうのが好きな方はぜひ見て行ってください！

ハーメルン初投稿なので拙い文章ですがよろしく願います。

アドバイスや感想、評価も遠慮なくしてください！

## 目次

私は彼に甘えたい。	1
僕は彼女に甘い。	5
アイドルの私。	10
声優の僕。	18
カズくんとの休日。	25
休日出勤はつらい。	31
休日出勤はつらいが面白い。	40
休日出勤はもう嫌だ。	47
嵐の前夜は甘々です。	53
嵐の始まり。	60
彼氏としての役目。	67
彼女の涙。	72
僕が君にできること。	77
夢の中の現実。	86
嵐の終幕。	91
嵐の余波と甘々。	98
久しぶりの休日。	102
ゲーム対決は罰ゲームありで。	106

私は彼に甘えたい。

「ただいま〜!」

玄関のドアを勢いよく開けて、私は待ちに待った家へと着く。

アイドルという少し……いや、だいぶ特殊な仕事をしている私こと、美波<sup>みなみの</sup>希<sup>そみ</sup>は

今日は久しぶりのライブで心身ともに疲れ切っています……

……けど、そんな心身疲れ切っている私の耳に、今一番聞きたかった“彼”の声が聞こえる。

「おう、おかえり」

そんな優しく包み込むような声に、私の顔は今相当緩み切ってるの  
だろうと思う。

実際……さつきから私の胸の鼓動が急にテンポを変えてドクドク  
と高まっている。

だから私は、早く彼に会いたくてアイドルらしからぬ脱ぎ方で急いで靴をポイポイと放り、  
小走りめに廊下を走る。

……早く、カズくん<sup>カズくん</sup>に会いたいっ!

そして、廊下とリビングを繋ぐドアをまるで壊すかのように開けると、

そこにはソファでリラックスした様子でテレビを眺めているカズくん<sup>カズくん</sup>がいた。

カズくんは勢いよく開けられたドアの方を見やり私を見つけた途端、すごい優しい笑顔で、

「おかえり、希。今日もご苦労様」

そう言っつて、その人懐っこそうな笑顔でそんな言葉をかけてくれる。

……もう、そ、そんなの……反則だよお……

私はもう我慢の制御ができなくなってるほどカズくんに触れたかったのか、

カズくんにも返事もせず、そのままカズくんの胸板めがけて飛び込んでいた。

「うおお！ どうしたんだ急に？」

カズくんは胸に飛び込んできた私を包み込むように受け止めると、そのまま私の頭をなでなで

しながら本当に分からないような、少し困惑した声で私に訊いてきた。

ああ……早くカズくんの質問に答えなくっちゃ……

けど、いくら私の脳がそう体に指示しようとしても、今の私の体はカズくんの

頭なでなでによって完全に機能を停止している。

カズくんのなでなでは癒し成分たっぷりなのだあ〜！

「……全く、希は本当に甘えん坊さんだな……いきなり飛び込んできてびっくりしたぞ？」

カズくんは説教のつもりなんだろうけど、声も顔も手も、どの動作も仕草も私にとっては

癒しでしかなくて、心身疲れ切っていたことがウソみたいに溶けていく。

ああ……毎日この態勢でなでなでしてくれないかな？

でも、そしたらカズくんが疲れちゃうかな……？

そんなことをぼわくんとした私の頭の中で思い浮かべていると、カズくんが私のおでこにトウツ！つとチョップをしてきた。

「ん〜！ いたい！ 何でチョップしたのっ！」

「希がアイドルらしからぬ顔で変なことを考えてそうだったからっ  
い」

「っ……！ ち、違うもん！ 変なこと考えてないもん」

「え〜？ だって希すんごい緩み切った顔だったぞ？」

あの顔をするときの希は碌なこと考えてないもんね」

うう……本当にカズくんには敵わないな……

私のこと全部見透かして、少しいじわるな笑みで私の方を見るカズ  
くんを見て、

私はプクーと頬を膨らましてみる。

「……あれ？ 希、おかんむり？」

「……」

本当は微塵も怒りの感情なんて浮かんでないんだけど、ちよつとだ  
けいじわるしてみたくて

私はカズくんの言葉を無視する。

すると、カズくんは私が無視したのを見ると、少し男の子特有のキ  
リツとした顔つきで

ゆつくりと私の顔の方に近づいていき、あともう少いで唇と唇とが  
触れ合いそうなんですの

ところで止め、またいじわるそうな笑顔で私の耳に囁いてきた。

「……じゃあ、これで機嫌直して……な？」

そう言っつて、カズくんは私の反応を見ないまま、私の頭をそつと抱  
え込み

チュツ……と、優しく触れ合うだけのキスをしてきた。

ああ……カズくんの、キス……

カズくんはすぐに唇を離すと、少し頬を赤くして、私と目が合うと  
照れと恥ずかしさを隠すように優しく微笑んだ。

本当……大好き、カズくん。

そうして、カズくんは私を抱え込むような体勢から元の通りに戻すと、

その場で立ち上がりパンと手を叩いた。

「よっし！ 希も静かになったし、今日は俺が担当だったな」

そう言うと、今日が晩御飯の担当であるカズくんがそそくさと台所へ向かう。

けど、途中でカズくんの足音が聞こえなくなったと思い、そちらの方へ顔を向けると、

「希は、そのまま休んどけな？」

そう言つて、私の頭をポンポンと撫で、また台所へと向かつていった。

結局私は、そのままカズくんの晩御飯ができるまで、顔を最高級にニヤつかせたまま、

えへえへと今さっきのカズくんとのキスのことを、ひたすら思い出していた。

僕は彼女に甘い。

「ごちそうさまでした！」

僕が作った渾身の料理を食べ終わり、彼女は満足そうにお腹をぽんぽんと叩いて

はふくつと目を細くしながら呟いた。

今日の晩御飯は彼女の好物である豆腐ハンバーグに、鰹節を出汁にしたお味噌汁、

それに簡単にドレッシングをかけたサラダにご飯という献立だ。

晩御飯が彼女と担当制になって以来、もともと料理をしたことがなかった僕は

暇なときは料理を勉強して、今はレシピさえあれば簡単に作れてしまうほど腕は上達した。

そんな彼女のために健気に料理を勉強する僕ことカズくんの名は、  
たろぼな かずくん  
橘一颯。

……自分で言うときもい上にめっちゃ恥ずかしいな……

ま、まあそれはさておき、僕は声優という仕事をしている。

声優という職業は一般人にとっては結構特殊な職業になるんだろうけど、自分が吹替えした映画

や声を務めたアニメとかを見たりすると、心の底から達成感と幸福感がどつと湧き出てくる。

それに、その映画やアニメが不特定多数の人たちに届いて、元氣や希望を与えていると思うと、

一般の仕事でも通じるものがあるんじゃないかと思ったりもする。

そんな僕の隣で、今幸せそうに口をはふはふ動かしている彼女は、僕の大切な彼女だ。

出会いについてはまた追々話すが、彼女もアイドルというかなり特殊な職業をしている。

普段の家での希は、今みたいにとても無防備で甘えん坊さんなのだが、アイドルでの希は



小柄の体型に色白の肌、黒色のポニーテールというプロポーションを生かし、

ファンの間では不思議な国のお嬢様と名高き評価を得ている。

……まあ、確かに希は肌が色白だし黒髪もしつかりと手入れされているから、

そう呼ばれるのも分からなくはないけど……家で希を見ると、とてもじゃないけど

不思議な国を統制できるようなお嬢様とは思えない。

反して俺はというと、至つて普通な面、略してフツメンというわけであり、

めちやくちやかっこいいわけでも、めちやくちやかっこ悪いというわけでもない。

……まあ、ちよつとカツコよくなろうと思つて、昔髪を茶髪にしたことがあつたが、

その時に希にマジな顔で似合つてないと言われ、その日のうちに元の黒髪に戻したのは秘密だ。

まあ、そんな僕たちだが、当然僕たちが付き合つてるといふことは誰にも言っていない。

いや……言つたら社会的にも過激派ファンのにも殺されるんだよな……僕が。

希のやつ、ファンの間でもめちやくちや人気だからな……そんな希が声優の僕なんかと

付き合つてると知つたファンは本当に僕を殺しかけない。いやマジで。

だから僕はいつも細心の注意を払つて、職場では絶対にプライベートの話はしないと決めてる。

僕のプライベート⇨希との生活&イチヤイチヤだからな☆！

……やっぱ僕が言うときモいな。

まあ、だから声優の仕事でラジオとかをやるときがあるんだが、あれは本当に心臓に悪い。

例えば、一緒にパーソナリティをやっている先輩声優さんに、「休日にしているの?」と

聞かれたならば、僕は普段冴えない脳を最大限に生かし、そうして必死に考えて

やつと生み出した答えが、「ひたすらペットを愛でています!」というものだった。

そのため、世間では僕にはペットがいるという認識になってしまい、挙句の果てには

ウイキペディアにペットと二人暮らしと書かれていた時は肝を冷やした。

……けど、希って何かと犬みたいに従順で尻尾を振ってそれで猫みたいに可愛いから、

ペットと言ってもあまり差し支えないような……?」

そんなくだらないことを考えていると、隣で静かにしていた希が急に僕の手をにぎにぎしてきた。

にぎにぎ。

「どうした?」

「ふっふーんっ♪」

……なんでドヤ顔しながら得意げににぎにぎしてるの?

「いや、何でドヤ顔なの?」

「ふっふーん♪ カズくん、今さっき私のこと考えてたでしょう?」

ギクツ!

な、なんでバレてんのー!?!

え、え? まさか今さっきのずっと声に出してた? え? え?!

カズくん大混乱である。

「だってえ〜カズくんのことずっと見てたら〜急に顔ニヤつかせてたんだもーん!」

……死にたい。

マジかよ……僕希のこと考えてた時ずっとニヤついてたのかよ

……

「カズくん分かりやすすぎー!」

「う、うるせ!」

ああ……希にいじられるなんて……一生の不覚!

これは僕も希に一矢報いなければ……!

「なあ希」

「うん? なになん」

「かわいいよ」

「あ、え、え? カズくん? い、いきなりどうしたの? そ、そん

な……」

「かわいい」

「あ、う、うう……カズくん……?」

「本当にかわいいよ……希」

「はうう……カズくんのバカあく……うう……」

と、こんなふうに着の希の耳元でちよつとクール風な声で囁くと希は僕の胸にぽすつと埋まり、

バカバカと僕の胸をぽすぽすと叩いてくる。

そこで僕が希の頭をなでなですると、次第にぽすぽすと叩いていた手を止め、

その手を僕の背中に回して「はうう……」つと小さい声で唸ってきた。

……ヤバいな……可愛すぎて絶対顔にやけてるって……!

僕は顔を片手で覆い隠し、もう一方の手で希の頭をなでなでし続ける。

なでなでなでなで。

今、希は僕の胸で埋まっているから顔がよく見えないんだけどどういふ顔をしているのだろうか?

そう思い、僕は背中に回されている希の腕を優しく解き希をそつと僕の胸から離すと……

「カズ……くん?」

ぽつりとそう呟き、小首をかしげている希の顔はすでにとろんととろけており、

そんな希の顔に思わず見惚れていると、不意に彼女が僕との距離を縮め、

あつという間に僕と希の唇は重なり合った。

「んっ……んちゅっ……んん……」

触れ合うだけの軽いキスだと思っ僕は、どうやら筋違いの間違いをしていたようだ。

仮にもアイドルである彼女が、こんな煽情的な顔を浮かべてキスをしてよろしいものなのか？

しかも悩ましい声を漏らしながら、必死に僕の唇を甘噛みしている。

ダメだ……俺の彼女がかわいすぎて死ぬ。

「っふはあ……ふう……ふう……えへへ……」

希は満足したのか、僕の唇から自分の唇を離すとぱあつと優しい笑顔を見せてきた。

この笑顔が、ファンたちを虜にしてるんだろうなあ……まあ、僕もその一人だけだね。

そうして僕はもう一度希の頭をなでなですると、希はまたにへらへらと顔を緩まして

僕の胸に体を預けた。

ああ、俺も彼女に甘いな……厳しくするつもりなんてないんだけどね☆！

……もうやめよう、このキャラ。

## アイドルの私。

メイクよし……髪型よし……衣装よし……

うん、大丈夫だっ！

私は今、今日のライブ会場であるこじんまりとしたホールの楽屋に  
来ています。

私が所属しているアイドルグループ・アイドルアフロール（略して  
アイアル）は、

去年やつのことでメジャーデビューした、まだまだ駆け出し中の  
アイドルグループだ。

“夢と希望と可愛さを”をモットーに、私たちアイアルは積極的に  
ライブ活動や

握手会を行っていて、巷ではなかなか評判の高いグループだと思  
う。……た、たぶんね？

そしてそのアイアルの中でも、A、B、Cの三つのグループに分か  
れていて、主に歌や

メディア出演とかアイアルの顔ともいえるのがAグループ。Aグ  
ループのバックダンスや

時々歌も歌ったりする、アイアルの影の立役者ともいえるのがBグ  
ループ。

そしてそのBグループの補佐を行なう縁の下の力持ちともいえる  
のがCグループだ。

各グループ六人ずつの計十八人のグループで、何よりグループ同士  
の仲がとっても良いのが

アイアルの魅力の一つでもある。

そんなアイアルだが、今日は満員でも百人入るかどうかという小さ  
なステージで歌う。

「どうしてそんな小さなところで歌うの？」という人もいるかもし  
れないけど、

今の私たちでは、こんな小さいステージでも、とにかくファンを一  
人でも多く取り込む

のに精一杯なのです。基本アイドルというのは、CDを出してその売り上げや影響がものをいう

世界で、いくら私たちが良い曲だと思っても、それが世間一般の人に共有できなければ

意味がないと同じなのです……アイドルって厳しいっ☆！

……カズくんが言ったら気持ち悪そうだな……まあもし言ったら全力で無視しよう！

まあ、ちよつと話がそれちゃったけど、そんな私たちアイアルは今楽屋でのんびりしています！

私は現在Aグループに所属していて、グループごとに最初は楽屋が分けられているんだけど、

分かれているのは最初だけで、十分も経てばすぐに他のグループのみんなも同じ楽屋に

集まってわーわーきゃーきゃーって「これからライブなんだよ？」って思わず

つつこみたくなるくらいはしゃいでいる。……けどそこがアイアルのいいところなんだけどね！

そんな私は、みんなとわーわーきゃーきゃーもしてたけど、途中からはそのノリから外れて

今は私の携帯電話とにらめっこしている。……ひ、ひとりぼっちってわけじゃないんだからね？

そんな私は、携帯電話を見て思わずにやけてしまう。そこには、私とカズくんが何とはなしに

家で撮ったカップル風自撮りを眺めていた。カップル風だよ？

ここ大事！

えへへえへ

えへへくうふふつ……えへへく

「どうしたの希？ そんなにやけて？」

「わわわっ?!」

急に声を掛けられ私は思わず大きな反応を取ってしまう。ああく

しまったあ〜……

そんな反応を見て声をかけたその子はとてもいじわるそうに笑う。

「え〜？　なんでそんなビックリするの〜？　普段は人見知りでクールキャラののぞみん

がなんで今さっきまであんなににやけてたの〜？」

「うう?!　そ、そんな人見知りとか言わないでよ、りんりん！」

「ああ〜？　にやけてたのは否定しないんだあ〜あはは、照れてるのぞみんかわいい〜！」

今、私の前ではは〜つと私の照れてる姿を笑ってる小悪魔ことりんりんは、私たちアイアルの

リーダーである東山凜とうやまりん。高い身長とかわいい笑顔でファンにも一番人気の

彼女は、私たちアイアルのリーダーだ。お互いのことをのぞみん、りんりんって呼びあつたりして

アイアルの中でも一位、二位を争うほど仲がいいんだけど、今さっきの会話を聞いて分かる通り、

基本的にはりんりんは少しSっ気があって、たまに私がカズくんとの写真見たりすると

すぐああやって私のところによってきていじってきたりする。全く、りんりんにも困ったものだ！

「ね〜のぞみん、今さっきまで何見てたの〜？」

「え、ええ?!　え、え〜つと……そ、そう！　猫！　猫の写真見ってた！

「え〜？　ホントに〜？」

「う、うん……ほ、ホントだよー」

「……のぞみん、のぞみん本当にウソが下手。そのウソをつくとき

のぞみん、大好き」

「ちよ、ちよつとりりんりん！　変なこと言わないでよー！」

「ほらあ〜その照れてる顔もホントかわいいな〜もう！　この顔で

ファンの人たちを虜にしてるのね」

「と、虜つてもう！　そんなつもりでこんな顔しないし！　ていう

か照れてないし！」

「まくたウソ言つてくのぞみん、本当に照れ屋さんだからカメラの前でもピースサインぐらい

しかできないもんね」

「う、うう……」

「そ・れ・に！ メンバーの自己紹介の時も一人だけ声が小さいもんね？」

「……だ、だってえ……自己紹介が終わった後のファンの人たちの掛け声が恥ずかしいんだもん……」

「ああゝのぞみひめゝ！」ってやつ？」

「う、うん……」

そう、私はファン人たちの間では、のぞみひめという愛称で呼ばれている。

ち、違うよ？ 別に私がそう呼ばせたように強制したわけじゃないよ？

ただ、ファンが増えていつてアイドルもメジャーデビューしたところにはもうその愛称で定着してたな……

「けど、のぞみんもアイドルの中ではかなり人気な方なんだから、い加減慣れたら？」

「に、人気って……でも、確かにそうだよね」

「うんうん、とりあえず自己紹介ぐらいは大きな声で言えるようにしないとね？」

「う、うん……」

でも……私、実のところは本当に人見知りで恥ずかしがり屋さんなんだよなあ……

特に男の人には人見知りが顕著で、一对一だとろくに挨拶もできない。

こういうところを直したくてアイドルになったっていうのも理由の一つだ。

だけど、やっぱり必然的に一对一になる握手会だどうしても緊張



していつもの笑顔が

できなくなるし、話だって満足がいくようにできない。

ライブの前だって、みんな平気そうに立ち振る舞っているけど、私はどうしても失敗したら

どうしようとか、歌えなかったらどうしようとか、不安に駆られる時がある。

けど……でもね？ 私がそういう風にならないために、実は特效薬があるんです！

それは……ズバリ！ カズくんのメールですっ！

例えば……

「カズくん、今から握手会だー緊張するー(T|T)」

「まあまあ落ち着いて落ち着いて」

「でもでも、もし失敗したらどうしよう……(〸〸〸)」

「大丈夫。希だったら絶対大丈夫。な？」

「うん……カズくんに言われたら、なんか大丈夫になってきたかも

(≡▽≡)」

「……それにしても……握手会ってさ……その、どんくらいやるの？」

「えっとねー大体一時間ぐらいかなー(？▽?)」

「………そっか」

「うん？ どったの？(〇〇)」

「ううん、なんでもない」

「そっかくじやあ私そろそろ行ってくるね？(、◇、)ゞ」

「おう、いってらっしゃい」

とまあ、こんな風にカズくんが文面越しに私を励ましてくれるんだけど、

なんでカズくんの言うことはこんなにも私に効果があるんだろう？

他の人が大丈夫〜って言っても、絶対に落ち着けないのに……むしろ焦っちゃうかな。

それなのにカズくんの言葉はいとも簡単に私の不安をかき消してくれる。

ホント、カズくんは魔法使いなんじゃないかな？ 私専用の。カズくんだけだよ……男の人であんなに素の私が出せるのは。

ああ……カズくんに早く会いたいなく会って抱きしめられてキスされたい。

えへへ……えへ、えへへへ……

もう、我慢できない！

ちよつと早いけど……いいよね？

そう心の中で私は呟くと、すつと携帯を取り出し、カズくんのトーク画面へと飛ぶ。

いつもだつたらライブの三十分前くらいなんだけど、今日はもう我慢ができなくなってしまった

ので、早速カズくんトークを飛ばしてみる。

「カズくん(´ω`)ノ」

すると、五分くらいしてからカズくんからトークが返ってくる。

「はいー」

返事はとつても素っ気ないものだったけど、それだけ見ただけで心がポカポカする。

「これからライブだー(´・ω・`)」

「おー頑張れー」

「でもちよつとだけ緊張するかも……(〽〽〽)」

「希はいつになったら緊張しなくなるのかな？(笑)」

「もうー！笑わないで！こっちは深刻なの！(； 皿、)」

「ごめんごめん、いつも通りメール来たからさ」

「だってさくライブもう少して始まるからさあ( p | | )」

「こっちは今ちようどアニメの吹替えが終わって休憩中だった」

「おおくおつかれ( \* , ▽ , )」

「ありがとう、でも希はこれからだね」

「うん……失敗しちゃったらどうしよう……( ; | ; )」

「うくん、別に失敗しちゃったっていいんじゃない？」

「え!? それはダメだよー(〽〽〽)」

「うん、でもさ? 別にそこまで成功にこだわらなくていいと思うんだよな。」

希がいまできることをみんなの前で魅せて、みんなを喜ばせればそれでいいんじゃない?」

「うん……そうかも! (≡◇≡)」

「それにさ……もし希が失敗してしんみりして帰って来ても、僕が慰めてあげるから

今から失敗とか考えないで思いっきり楽しんでおいで(ゝゝ♪)」

あ……ヤバイこれ……絶対私、にやけちゃってる……

と、とにかく……早く返信しなくちゃ……

「ありがと、じゃあ行つてくるね(ゝ——)——☆」

「おう、僕もそろそろ仕事に戻るね、頑張れ希」

ちよ、ちよつと素っ気なかったな? で、でもカズくんそういうの気にしないよね?

それに最後の「頑張れ希」がもうかつこよすぎて軽くアイスクリーム三杯は行けちゃう。

でもアイスクリーム三杯も食べちゃったら体重増えちゃう……

「のぞみん——、そろそろライブ準備いくよー」

「あ、うん! 今行く!」

カズくとメール上でおしゃべりしていると、あつという間に時間が過ぎていたようだ。

みんなももうりんりんの前に集合していて、ライブに向けての準備をしていた。

私は少し急ぎ目にその輪に入ってるりんりんの前に立つと、そこにはもう今さっきのりんりんの

姿はなく、代わりにアイアルのリーダーとしての凛々しい姿が私たちを束ねていた。

「さあ! 今日も来てくれているファンの人たちに精一杯の力を出そう!」

「「おーう!」」

そうして、私たちアイアルの出番がやってくる。  
ドクンドクンとなっている心臓の音も、今は心地よささえ感じられる。

幕が引かれ、徐々に私たちの姿が見え隠れする。

さあ！ 今日もいっぱい楽しんで、いっぱい元気をあげて、いっぱい元気をもらって、

いっぱいカズくんに今日のことお話ししよう！

それじゃあ行ってくるよ、カズくん！

## 声優の僕。

「ありがと、じゃあ行ってくるね（――）――☆」

「おう、僕もそろそろ仕事に戻るね、頑張れ希」

ふう……全く希は……

緩む頬を必死に隠して、僕は自分の携帯電話の電源を切る。

僕は今、とあるスタジオでアニメの吹替えをしていて、今は休憩をもらって休ませてもらって

いるところだ。一緒のアニメで共演してい他のみんなは、この休憩中でも台本を一生懸命見て

いたり、監督さんにアドバイスをもらっていたりと、ずっと携帯電話話いじっていた僕からしたら

ちよつと心苦しい光景なのだが、これもまあ仕方ないと割り切っている。

……え？ どうしてまだ若手なのにそんな割り切ってるんだこのボケ？

いや、まあ……僕も“あれ”がない日はいつも台本を見直したり次のセリフはどこをどうやって

言おうかとか色々考えるけど……

……ん？ あれってなんだ、もったいぶんないで早く言えこのバカチン？

はい、すみませんでした！ 今後はこういうことがないよう精一杯善処しますっ！

……僕は一人で何やってるんだ……

ま、まあ話を戻して。“あれ”というのは、もう分かっているかもしれないが、希のことだ。

もつと詳しく言うとう、希の「カズくん助けて大変なのメール」略してカズへんメールのことだ。

……僕の略し方にセンスの欠片もないことは禁句だからやめてね、カズくんへこんじやう。

そんなカズへんメールは、希が地下アイドルのときからずっと来ていたもので、

希はもともと、あまり人前に入るようなタイプじゃなく、むしろアイドルを応援している姿の

方がずつと似合っているような子だった。誰に対しても人見知り、特に男の人になると

もう手も当てられないくらい緊張しちやって、あの頃は僕も大変だったな〜……

それに、恥ずかしがり屋さんで前僕に、「カズくん〜！ カメラの前でポーズができないの！」

ってまじめな方で質問されたときは本当にアイドルなの？ と思わず心配するほどだった。

でも、そんな希も昔と比べて、本当に成長したと思う。確かに今も相当の人見知りで恥ずかしがり屋だけど、昔に比べるとだいぶ落ち着いてきた。

地下アイドル時代は、当時は貴重だった握手会の日でも、「絶対に行かない！ ここで

カズくんとふたりでいるー！」と家で僕に抱き着いて泣き始めたりと、だいぶ手を焼いていた。

結局その日は僕と一緒にその会場まで一緒に行つてあげたが、会場前まで手を繋がらせられた

のでバレたらどうしようかとめっちゃ心配だった。まあ結局はバレなかったからセーフだったけど。

でも、今では握手会の日になるとめっちゃ上機嫌になって僕の言葉なんかなくても家から

出られるようになった。彼氏目線からしたら少々悲しいことでもあるが、希がそれで

他の人たちに魅力を分かってもらえるんだったら、断然そっちの方がいいと思う。

でも、そんな成長した希でもカズへんメールだけは終わらなかった。

もはや希のルーティンになっているのか、ライブの日や握手会の日になるといつも希が文の最後

に顔文字をつけて僕にメールをしてくるのだ。文面上でも希の可愛さが伝わって来ていつも顔を

緩ませずにいられないのだが、それは希がかわいいからなので僕は何も悪くない。

それで、僕も希の文に返信するのだが、正直僕はあまりメールをする人に向いていないと思う。

メールって字体だけでしか相手に伝えられないため、本当に希に伝わっているのか

不安になるときがある。僕はいつも希が落ち着けられるようにと思つて返信してるけど、

果たして希は落ち着いてくれるのか、逆に焦らせてしまっているのではないか。

……とまあ、そんなことを思つてるのだが、希はどうやら満足している様なので結果オーライだ！

「橘く〜ん！」

いやあ、それにしても、希つてメールまで可愛さ伝えられるってすごくない？

いちいち文の最後に顔文字入れてくるの可愛すぎだつて。

「橘くん？」

ホント、希には帰ってから注意しないとな。

メールで男の人に顔文字禁止令をだそう！ あ、でもそれ僕も含まれる？

はい却下。すぐ却下。やっぱこの禁止令はまたいつかだそう、うん。

と、いつも通り僕が頭の中でバカなことを考えていると、不意に頭上から可愛らしい声が響いた。

「ちよつと橘くん！ 聞いてますかー？」

「うわあ!?!」

座つて俯いていた僕は慌てて顔を上げると、そこにはぷりぷりと可

愛らしく怒っていた女の人がいた。

身長は150センチもないくらいで、ゆるふわな髪型と身長のわりに発達した大きな胸、

そして何より聞いたら忘れられないような澄み切った声の特徴のこの人は、僕と同じ事務所、

虹色プロダクションに入っている華咲紗季はなさき さきさんだ。

「もう、橘くんさつきから何ぼーっとしてたの?」

「あ、いや、その少し考え事をしておりまして……あはは……」

「考え事? 橘くんなんか困ってることでもあるの? 私でよければ相談に乗るよ?」

「い、いやいや! 大丈夫大丈夫! そんな大して深刻な悩みじゃないから」

「そ、そう? だったらよかった!」

そう言い笑顔で受け答えしてる紗季さんは、僕と同一年でいわゆる同期というわけだ。

僕はもともと昔出演したアニメが大ヒットして、その中でも僕の役がたまたま人気になって

ここまですごいのだが、彼女の場合は最初から大注目の期待の新人だった。

事務所の方も彼女のことを猛プッシュして、彼女はここ数年本当に大変なのだろうと思う。

でも、今の彼女がこんな僕にまで気を回して話してきてくれる当たり、彼女の人柄の良さが

滲み出てると思う。所詮声優界というのは名前と顔を覚えてもらえたもの勝ちなので、

彼女のように笑顔もよくて人柄も良いとなると、相当プラスになっているんだらうなと思う。

「もう、今日はこの後一緒にラジオがあるんだからしっかりしてね?」

「え? 今日ってラジオの日だっけ?」

「そうだよ! まさか橘くん忘れてた!」



「あ、あ、あーそうだったーきょうはラジオの日だったーあ、あははー」

「……橘くんウソ下手すぎだって」

グハッ！

の、希の方が断然ウソ下手なのに……！

「それで、橘くんこの後何か用事あったの？」

「え？」

「だって、なんか橘くんラジオあるって言ったらちよつと表情曇ったし」

「く、曇ってない曇ってない！」

「えー？ 本当かな？」

「ほ、ホントホント！ ちよつとペットに会えないからってだけで！」

「あく！ やっぱりそうだ！ 本当に橘くんはペットコンなんだから」

「ペ、ペットコン？」

「そー、ブラコンとかシスコンとかあるでしょ？ だから橘くんはペットコンー」

「……は、はあ……」

「ちよ、ちよつと引かないでくんない！ 実際そうでしょ！」

……まあ、実際ペットコンっていうより希コンですけどね。

でもそんなことは口が裂けても心臓が貫かれても言えないので言わない。

……ていうか心臓が貫かれたらもう死んでるから言えないのか。カズくんったらバカな子☆！

……あーキモイキモイ（自分です。）

「あ、私もうそろそろ行かなくちゃ！ じゃあまた……と言ってもすぐ会うのかな？」

「まあ、同じアニメだからね」

「そ、そうだよね！ じゃあまたすぐ、じゃあね」

「はーい」

小走りながら振り返って手を振ってくるあたり、本当に彼女は人柄がいいと思わざるを得ない。

仕方なく僕もぎこちなく手を振ってみるが、これ相当恥ずかしいぞ。

周りを見て誰もいないのを確認して、ふっと安堵する。

「……あ、そう言えば。希に今日帰り遅くなるって伝えないうとな……」

そう、今日僕はこの収録が終わったらそのまま帰れると思っていたため晩御飯は僕が担当に

なっていたのだが、ラジオがあるとなると相当帰りが遅くなるので伝えなくては。

そう思い、僕は携帯の電源を再度入れ、トーク画面に飛ぶとその趣旨を打ち込む。

「希、ライブお疲れさま。今日は僕が晩御飯の担当だったけど

今日この後ラジオがあつたのをすっかり忘れていたため帰りが遅くなります」

よしこれでいいか。たぶん希も今はライブがあるだろうし、すぐには返信が来ないだろう。

はあ、僕はこれから収録か……先輩たちに迷惑を掛けられないし、いつもよりも集中して

取り組もう。いつも集中してないわけじゃないからね？

あ、ちなみに紹介しておく、今回僕や紗季さんが出演するアニメはいわゆるハーレムものだ。

僕はそのハーレムを刻々と築き上げる主人公役で紗季さんはその中のヒロインの一人なのだが、

今回僕はその手のアニメの主人公というものに初めて声をあてる。

先輩には、ハーレムアニメの主人公は批判されやすいから注意しろと忠告を言われたことが

あるのだが、収録の時点でその可能性がどんどん色濃くしていつて

怖い……

……でも、これは僕がオーディションで何十人もの中からとった大事な大事なキャラだ。

言ってみれば彼は僕の分身であり、僕は彼の分身なのである。二人で一人の一心同体の

キャラなのだ。だから僕はこのアニメを絶対に成功させたい。絶対成功させてもつとみんなに

アニメって面白いって思わせたい。そして、もつとみんなに笑ってほしい。

……これが僕が声優になった理由かもしれない……かも？

「橘さーん！ そろそろ収録入りまーす」

「あ、はい！ 今向かいます！」

よつし、ちよつとスイッチも入ってきたことだし、これから頑張りますか！

ちよつと緊張してきたけど……大丈夫、だよな？

それじゃあ行ってくる、希！

カズくんとの休日。

「カズくーん！ おーきーてー！」

「ん……あともうごぶん……」

そう言い、再びカズくんが毛布を被ろうとしていたところに、私はタイミングよく滑り込む。

「もうっ！ カズくん早く起きてよー！」

「んん……まだねむい……」

「眠いじゃないのっ！ いい加減起きてー！」

「……わかつたって……おきてますよ……」

「うう……顔が寝てるじゃん！」

そんな私のツツコミも無視して、隣で幸せそうに寝ているカズくん。

本当にカズくんは……こんなに朝に弱い人いるのかなあ？

もうカズくんと付き合って、一年半くらいになるんだけど、カズくんとの朝はいつもこうだ。

私はいつも、休日でも割と早く起きちやう。たぶん、アイドルでの生活での早寝早起きが体に

浸み込んだりしたからなんだと思う。

だけど、隣にいるこのねぼすけさんことカズくんは、本当に起こさないとききない。

例えばこの間の休日とかも、カズくんがその前日に八時に起こしてくれ、って言うってきたから

私はその通りに起こしに行ったんだけど、当のカズくんは全然起きる気がなくて、

結局私を抱き枕代わりにまでした挙句十時まで寝ていたかなりの強者なのだ！

もうホントに、カズくんはこういうところで抜けてるんだから……

と、私がカズくんの布団の上で考えていると、不意にカズくんが寝ぼけてなのかわざとなのか、

私の方に寝転がって来てそのまま私の背中に腕を回してきた。

……これ、いつものパターン、かも……

「カ、カズくん……いい、いくら私でも、もうこの手には乗らないか……うら……あつ……」

「……だって、朝起きるのだからさ……起きるよりこうやって希といたほうがいいし……さ」

そうやってちよつとだけいじけて言うカズくんは、私の顔はほとんど赤くなつていく。

「で、でも……今日カズくんはお仕事あるんでしょう?」

「……うん」

「だ、だったら! やっぱりちゃんと起きなさいっ」

「……分かった、じゃあちゃんと起きるからさ……あと十分だけ」

「え?……あつ……ひやう!」

やっと起きる気になつたか……と、私が油断した途端。

急にカズくんが私の体を強引にカズくんの方へと抱き寄せてきた。

「カ、カズくん?」

「……はあ……ついてないな……」

「え? 何が?」

「今日さ……久しぶりに希と、その……一緒にいれると思つたのにさ……」

「う、うん……」

「なのに……なんで今日仕事が入っちゃったかな……」

「あ……」

そう。今日カズくんは、本当だったら休みだったんだけど、昨日先輩の声優さんが体調を崩した

らしく、その人が出演するはずだったイベントに、急遽代役としてカズくんが選ばれてしまったのだ。

本当だったらこんなことはないんだけど、事務所側からはカズくんを推していきたいらしく、

カズくんもマネージャーからどうしても頼まれ、今日も出勤しなきゃいけないらしい。

私も、最初はそれを聞いてちよつと……いや、だいぶがっかりしたけど、カズくんがここまで

がっかりしてるのは、ちよつと嬉しいかも。

「あー……やっぱり断ればよかったかな……」

「ダメでしょ？　せつかくカズくんのために事務所がお仕事くれたんだから。」

私は大丈夫だから、行っておいで。ね？」

「……でも、希もこれからあまり休みとれないんだよね？」

「あー……うん、ちよつとこれから大きなイベントが多くなるから……」

「……そっか……ああく先輩め……僕たちに体調管理しろってうるさいのに、

自分が体調管理できてないじゃん……」

「……から、先輩の悪口言わないのっ」

でも、確かに私とカズくんみたいにいわゆる芸能人同士のカップルってこんなことばかりだよな。

休みなんていつ取れるかわからないし、たとえば休みが取れたとしてもその日に二人一緒に

休みが合う可能性は結構低いだろうし。だから、カズくんがああやっていじけちゃうのも

何となく分かる。私もカズくんと同じ立場だったらああなつてたと思うし……

というか……さ。

さつきからいじけてるカズくん、ちよつとかわいくない？

だって要するにカズくんは私とイチヤイチャできないからあんなにふてくされてるんでしょ？

えへ、えへへ……カズくんってそういうところあるよね。

いつも「希は甘えん坊さんだ」っていうけど、カズくんも実はけっこう甘えん坊さんだし。

でもこれ言っちゃうとカズくんにいじられちゃうから言わないでおい。

カズくんSだし。超Sだし。

……でも……ちよつとだけ、ちよつとだけカズくんに悪戯しちゃうかな？

そう思い、私は未だ腑に落ちていないカズくんの様子を見ると、カズくんにはバレないように

そくつとそくつと忍び寄り、やがて目的のところまでたどり着くと、あむつとそれを甘噛みした。

「うおっ!?! の、希?」

あはは、カズくんビツクリしてるー! ミッション成功だあ!

私はカズくんの耳をはむはむと啜っていると、カズくんはあつという間に顔を赤くさせた。

「なにして……カズくんのお耳をはむはむしてるの!」

「は、はむはむして……心臓に悪いからやめてくれ!」

「いーやーだあ。もつとはむはむするー」

「ちよ、ちよつと希!」

「……あむつ……あむつ……あむつ!」

「希……僕の耳は食べ物じゃないからね?」

「む?……あむ、あむ……」

……美味しい。

カズくんのお耳つて、小さいけど形は男らしくはつきりしてて、耳たぶとか

めつちや柔らかくて、さつきからちよつとだけ癖になってるかも

……

「くっ……このっ……よい……しよっ!」

「はう?!」

私が一生懸命カズくんのお耳をあむあむしていると、不意に景色がぐるつと変わった。

今さっきまではカズくんの上にいた私は、今は仰向けになって、視界には天井が広がってる。

あれ? そういえばカズくんは?

「……だよ、ほれっ」

「いたっ……ちよつとカズくんっ！」

私がカズくんを探していると、不意にカズくんが私のおでこにでこぴんしてきた。

もう！ 一応私もアイドルなんだよ？ 跡ついちゃったらどうするの！

おでこを手で押さえながら、私は恨めしい目でカズくんのことを睨む。

すると、カズくんは私の体の上に跨るような体勢になってじつとこつちを見つめてくる。

そして、カズくんはいたずらをするときの顔になると、ふつと顔をこちらに寄せて

ちよつとだけ復讐の色を混ぜながら私の耳元に囁いた。

「……今さっきの仕返し……だから」

そういうと、カズくんは私の方に顔を寄せると、わずかに首を傾げながら私の唇を奪ってきた。

「んんっ……ぷはあ……ん、んん……んちゅっ……んむっ、ぷはあ……」

普段するような、あんな軽いキスじゃなくて、恋人同士でしかしないような愛を確かめ合うキス。

それは時間にしたらほんの数秒なんだろうけど、私にとっては何時間のようにも思えた。

たぶん……それはカズくんも同じようで、唇を離れた後もじつとこつちを見つめてきていた。

……カズくんのキス……ホント好き。

私を、アイドルとしての私だけじゃなくて、アイドルとしても素のままの私としても本当に

大切にしてくれてるんだなって思うような、優しいカズくんのキス。キスなんて、

カズくんとしかしたことがないし、これからもカズくんとしかするつもりはないけど、

それでも下手したら抜け出せないのではないかというほど深くて、



私を優しく包み込んでくれるようなキス。

……もうちよつと、もうちよつとだけ……いいよね？

だから私は、もうちよつとだけカズくんの暖かさが欲しくて、つい  
つい甘えん坊になっちゃう

けど、これはカズくんが優しすぎるので私は何も悪くない。うん、  
そうだ！

「カズくん……もつとお……チュー、して？」

だから、私がこうやっておねだりするのもし方がないのだあ……え  
へ、えへへ……

休日出勤はつらい。

どうしてこうなった。

今僕は、食卓に並べられた希が作ってくれた朝ごはん（めっちゃおいしい）を食べながら、隣でさつきから僕の腕に絡みついて離れない希を見て、ふっと息をつく。

「あ、あの〜……希さん？」

「ふっふーん♪ にゃ〜……」

……もう一回言おう。

どうしてこうなったっ!?

いや、まあ大体理解できるんだけどね。

そう……今日僕はもともと休みだったのにも関わらず、あの忌まわしき先輩が急に昨日体調を

崩したせいで、急遽その先輩が出るはずだったイベントの代役として僕が出ることになった。

いやおかしくない?! 普通代役とか使わないでしょ!

だいたい、僕がそのイベントに出てもそのアニメで声を当てた役つて一話分しか登場しない

敵キャラだから僕がそのイベントに出たところでしらけるだけなんだよー！ー！ー！

……と、まあこんな風に昨日マネージャーから聞かされて家に帰ったときのテンションは

死んだ魚よりも低かったと思う。それで、昨日希にそのテンションで明日は八時に起こしてくれ

と伝言をして希と一緒に寝たはずなんだが……今日起きた時間は九時半だった。

まあ、それも仕方ないと言えば仕方ない。僕の朝の弱さと、希のそれを許しちゃう優しさと、

極めつけにあんなムードになったりでもしたらこんな時間になっても誰も文句は言えない。

正直……あんなムードになるなんて思ってた。いやだって朝だよ？

急に希に耳を甘噛みされたときにはマジで心臓が飛び出そうだった。表情には出さなかったけど。

それで希が耳をあむあむしてるもんだから仕返しにと思っただけチューしてもう落ち着くかな

って思ってたらまさかの「……もつとチューして？」だぞ!?

さすがの僕も我慢できなくて三回くらいしちやっただけど、その後の希の方がさらに激しかった。

いやんっ！ もうカズくんお嫁にいけないっ！

それでまあ結局そのままずっとイチヤイチャしてたら、いつの間にか時間が過ぎていました。

本当に、時間というのは残酷だな……これめっちゃイケボで言ったらかつこよくなるかな？

あ、あと今さっきのボケは完全スルーの方針なんで、ご了承ください。い。

……僕はなにを言ってるんだ。

ピコンピコン

「……ん？ メールかな」

そして今、朝ごはん（めっちゃおいしい）を食べ終えて、歯磨きとかも全部終えてソファで希と

だら〜んと何とも幸せな空間を味わっていたら、不意に僕の携帯が鳴り始めた。

この音はメールの受信音なので、おそらくマネージャーから今日イベントがあるので忘れずに

というような業務連絡だろう。そう思い、僕は携帯を開いてトーク画面へ開いてみると、

そこには思いもしなかった人が僕にメールを送っていた。

「こんにちは！ もう起きていますか？ というか起きてないままずいじゃん！

えっと、初めてのメールだからちよつとだけ緊張してるけど、ぜひ返信ください（≡◇≡）

あと、今日イベント代役？ なんだっけ？ 私もそのイベントに出演するのでよろしくね！

じゃあ返信ください！（＾＾）！ 華咲紗季

……………ん？

……………んん？

なにこれ？ え、何で紗季さんからメール送られてるの？

ていうか緊張とか言いながらめっちゃ顔文字とかビックリマークとか入れてんじやん。

しかも何気に返信くださいって二回入れてるし……………どんだけ返信欲しいんだこの人。

「にやにやにやくん♫……………ん？ カズくん？」

どうしようかなこれ。

え、こういう時なんて返せばいいの？ というかこれ一斉送信かな？

紗季さんのことだから気を遣ってイベントに出演する人みんなに送ってるにちがいない。

……………違う……………だと？ え、もうどうしようこれ。やばい、カズくん軽いパニック！

「ううくん！ カズくん！」

「うわっ!? の、希？」

そうして僕が紗季さんからの謎のメールを凝視していると、不意にちよつと怒り気味である

希が僕のことを睨んできた。え、なんで？

「カズくん！ さつきから何で私を無視してるの！」

「え？ 希、なんか僕のこと呼んでた？」

「そうじゃなくて！ さつきまで一緒に遊んでたじゃん！」

「あ、あくあ……………ちよつと、な」

「もうくあーそーぼーよー」

「ちよ〜と待つてろな？ 今すぐ終わらせるから」

いや〜さつきからやけに腕が痛いと思つてたら、希がずっと腕を抱きしめてたからなのね。

ちよつと心臓が飛び出そうだからそういう行動、言動、仕草は今後一切気を付けてくださいね。

それにしても、どう返したもんかな……いつそのこと僕もパリピみたいにあげあげな感じで

返信しようかな？ あ〜でもそうすると引かれそうだしな……

よし！ 決めた！

「了解。 橘一颯」

よ〜っし。これでいいだろう、無難が一番だつて先輩も言つてたしな。

そう思い、僕はこのメールを送ると携帯を机に置いて希の方へ向く。

「希〜おいで〜」

「あ……！ にゃん！」

「おうよしよし〜希猫はいい子ですね〜」

「ん〜にゃん！」

……はは、文面にするところも希が可愛くなつて僕がきもくなるのか。

そう、今さつきまで、それこそメールが来るまで、僕たちは猫ごっこをしていた。

……ご、誤解しないで！ こ、これは別に僕が希に強要してるわけじゃないからな?!

たまに希がイチャイチャした反動で猫化しちゃうことがあつてです、それで試しに僕が

猫みたいに希のことを扱っていたら結構嵌つてしまいました……

それで希が猫化するとこの遊びをするんだけど、もう心が浄化されすぎてやばい。

もういつそ一日中希と猫ごっこしたい。うん、文面犯罪臭しかな

いからやめとこ。」

「にゃん？」

「お、どうしたんですか？」

「にゃんにゃん、んー……にゃくん！」

「おーそうですか！頭なでなでして欲しいのですか！」

「にゃん！」

「じゃあ特別になでなでしてあげましょう！」

「にゃくん」

いやもうこの遊び神ゲーでしょ。こんな楽しいゲーム他にないよ？

ただ他の人に見られたら間違いなくそいつに殺されるからする際には責任は負わないので注意してお遊びください。

……と、僕がこの上ない幸せな空間を楽しんでいると、またもや携帯が一定のテンポで鳴る。

ま・さ・か。

僕は希のなでなでを即座にやめ、机に置いてある携帯をおそる見ると、そこにはさつきと

同じ人からの送り主のメールが届いていた。

「もう！ 橘くん素っ気なさすぎ（；・・・） もうちよつとなんかあるでしょ（＞＜）」

今度はもうちよつと愛嬌のあるメールでお願い！」

……いやいやいや。

なんで僕怒られてるの!? なんかいけないことした？

というかこれも一回返信しないといけないパターンなのか？

……仕方ない、ここで満足のいくメール送ってもうこのやりとりを終わらせるか。

正直僕の身が持たない。

「すみません。ところで今日は天気がとてもいい日ですね。

この調子でイベントも成功するといいですよね。」

「……カズくん」

か、完璧だ……

ご注文の通り愛嬌もよく、今日のイベントのことも触れて話を進めている。

よし、これで希との猫ごっこにももどれ……

ピコンピコン

「もう、ちがー！ー！ー！うー！（；； ㄩ、） こんなメールどこも

愛嬌ないじゃん（p——）

ほら、もつと普通に会話するようにお願い！」

あ、愛嬌……なかったの……

ウソだ！ 今さっきのメールは完璧だったはずなのに！

……次は会話するようにだな、よし！

「今日の天気は雲一つない快晴ですね。こんな日にイベントができて本当に

よかった〜なんて、m（——）m」

「ねえ、カズくん！」

こ、これなんてもう非の打ち所がないようなメールじゃないか。

も、もうこれでメールも来ないだろう……これで猫ごっこが……

「ちーがーう（ㄩ、） ていうか言ってる内容前のとまんま同じだし!？」

あと最後の顔文字なんで謝ってるの？」

……そう言えば前のメールもあんなこと言ってたな……

ど、どうする？ 次はなんて送れば……

「もう！ カズくん！」

「うわっ!？」

若干のデジヤヴを感じながら、僕は今まで忘れてしまっていた希の方をゆっくりと顔を向ける。

そこには、もう不機嫌を通り越して拗ねてしまっている希がいた。

「の、希………さん？ あ、あのですね？」

「……女の人」

「え？」

「女の人……でしょ、カズくんがメールしてた人」

「あ、あー……ま、まあ確かに女の人だけど、同じ同期仲間みたいなもんで」

「仲いいんだ」

「いや、それは断じて違うぞ？　僕あの人にあんまよく思われてないと思うし」

「……でも、メールしてたカズくん、一生懸命だった……」

「あー……それはある意味そうだったけどさ……」

そうして僕が答えあぐねていると、希はばあつと僕の方に抱き着いてきた。

「……カズくん、カズくんの彼女は誰ですか」

「……えつと、の、希……です」

「じゃあその彼女のことほつといて誰とメールしてたんですか」

「……すみませんでした」

「…………バカ」

そう言うと、希はそのまま僕の胸に顔を埋めたままそのまま動かなくなってしまう。

……無神経なこと、しちやったかもな。せつかく久しぶりの二人の休日だったのに。

そりゃ希だって、少しは普段甘えられない分甘えたい……はずだよな。

「ごめん、希」

だから、せめてもの償いとして彼女のことをギュッと抱きしめる。

「ごめん、帰ってきたら絶対希と一緒にいるから」

「……メールは？」

「しません！　絶対にしません！」

「……待ってる」

相当拗ねているんだろうか、彼女は言葉短にそうとしか言わなかったが、

確かにそつと僕のことを抱き返すのをみて、思わず嬉しさがこみ上げる。



ピコンピコン

……あ、メールだ。うわ、希めっちゃ僕のこと睨んでるよ……  
分かってるって、今はこのままにしてるから。

ピコンピコン

……あれ？ また鳴ってる？

……分かってるって、分かってるからそんな睨まないで〜！

ピコンピコン

「ごめん……希、ちよつとだけ見ていい？」

「……うん」

希の承諾を得て、僕はさつきからなっていたメールを見ると、それはマネージャーからだった。

な、なんだ……紗季さんからだと思つてちよつとだけびくびくしてたぜ……

でも、いったいマネージャーから何の連絡だ？

僕はこの時、？気にそう思っていたが、そのメールを見て僕は一瞬頭が真っ白になった。

「橘さん、もう出発の時間ですがまだですか？ マネージャー」

「わ、わすれてた……」

「か、カズくん?!」

マネージャーのメールを見て、僕は思わず大声を出してしまう。

今回イベント会場へは、一度事務所に行つてその事務所から出る車で行くんだけど、

僕はその出発の時間をとうに忘れていて今現在ここにいる。

……こりやマネージャーに怒られるな……

そう思いながら、僕は急いで支度を済ませて玄関に向かおうと思つたが、

僕はその途中、忘れてきたものがあつたので急いでリビングへと戻る。

「希、行ってきますす！」

「んっ……うん、遅れないようにね」

「いや、もう十分遅れてるんだけどな」

「え!? そうなの? じゃあ早く行かなくっちゃ!」

「おう! というわけで行ってきます!」

「うん、いってらっしゃい!」

希とのいってきますのキスも済まして、僕は玄関を出ると全速力で走る。

そして、携帯を取り出してマネージャーに電話をすると一コールしてすぐ出た。

「すみません! あと五分で着きます!」

マネージャーのやれやれという声を聞いて少し苦笑いしてしまう。本当にすみません。

ああ……希と猫ごっこしてたかったな……

そう思いながら、僕は事務所へと走っていくのであった。

休日出勤はつらい。

休日出勤はつらいが面白い。

「本当にすみませんでした！」

高速道路を走る車の中で、僕は今同席しているみんなに深く頭を下げた。

「まーまー、橘は遅刻魔つてもつぱらの噂だから気にしてないよ！」

「は、はい……で、でも！ 別にそんな待ったわけじゃないですし、

そこまで謝らなくても大丈夫ですよ、橘先輩？」

「うんうん！ 橘くんは遅刻して当たり前なんだから、そんな謝らなくていいよ！」

……いや、これ普通に怒られるより辛いんですけど。

え？ 僕そんな遅刻魔!? そんな噂になつてるレベルなの!?

「いや〜でも毎回毎回期待を裏切らないね〜橘は！ 俺はいい後輩を持った！」

そう言つて、僕のことをバカにしてるとしか思えないこの人の名は  
齊藤淳平さいとう じゅんぺいさん。

一応僕の三つ上の先輩で、駆け出しのころはよく世話になつても  
らつた先輩だ。

まあ、この先輩はいつもこんな感じでチャラチャラとしてるが、収録になると

人が変わったように真剣に声をあてている姿は後輩の僕にも見習うべきところがある。

……まあ声優業以外の先輩はあまり見習いたくないけどね。

「た、橘先輩はよく遅刻しますけど！ その……いつもはまじめなのでその……」

一生懸命なところとか、ちゃんといいたころはあります！ 気を持ち直してください！」

……いや、一生懸命なところってあなた……大体それ言つとけばOKみたいな風習あるよね？

と、まあそんなことはさておき。ちよつとおどおどしててまだほんの少しだけ幼げなところが

残ってる彼女の名前は三葉琴子。みつばことこ 僕の四つ下の後輩で、彼女の憧れの声優さんは

なんとこの僕なのだ!……い、いや、マジで一体僕のどこに憧れたんだろうか、今からでも

憧れの人変えた方がカズくんいいと思うな。あ、一人称カズくんって案外いいかも。

これから使ってみようかな? カズくん、希、好き!……いや、ないな。

……てか若干ポニョったのは許してね。ポニョったなんだよポニョったって。

「まあ、橘くんも悪気はないんだし今日のところは許してあげる!」  
そして、無駄に満面な笑みで僕にぐつと親指を立ててくるこの人は、遅刻をした元凶ともいえる

紗季さんだ。紗季さんのメール返すのどれだけ大変だったと思ってるんですか……!

おかげで希との至高の猫ごっこできなかつたじゃないですか!

「……ん? 橘くんどうしたの?」

「いえ特になんでもありません」

と、まあそんなことは絶対に言えないので僕は即答で答える。

はあ……それにしても辛いな……希の猫ごっこ思い出したら早く帰りたくなっちゃった。

まだイベント始まってもないのに。

今、僕たちがいるこの車はイベント会場へと向かっているのだが、そのイベント会場まで

着くのはまだ一時間ほどある。それに、イベントもそもそも二時間ぐらいあるから……

な、なんだと……!?! 帰ったらもう夜だと……!

どうしよう、希との時間が……カズくん泣いちゃう!

「のーぞーみー(´ω´)ノ」

だから、車が目的地に着くまでしばし希とのメールに身を投じるとしよう。

この人たちも三人でなんかやってるだろう、たぶん。

「カーズーくん(´ω´)ノ」

お、早速来たな……って希……可愛いじゃないか全く！

「結局時間は大丈夫だったの？(´・ω・´)」

「うん、まあ無事車に乗れたし結果オーライかな」

「そか……よかった(\*´▽´)」

……どうしよう。僕の彼女が可愛すぎる件。

これは大問題ですね……早く家に帰って希の頭をわしやわしやなでなでしなくては。

「今何してるの？」

「アイアルの予定表見てた(；\_；)」

「これから忙しそう？」

「うん……カズくんにも会えなくなっちゃう(；\_；)」

「でも、アイドルの活動も大事だもんね」

「うん」

「じゃあ、希もアイアルのみんなと一緒に頑張らないとな」

「……うん」

……あれ？　なんか希返事がさつきから元気ないな、顔文字もないし。

どうしたんだろう……

「今日はいつ帰ってくるの？(´・ω・´)」

「そうだな……大体七時くらいかな？」

「そか……あと六時間半もある……(；\_；)／＼／＼」

「うん、帰ったらまた一緒にいようね」

「絶対だよ？　絶対絶対絶対だよ(∩\_∩)」

「うん、絶対な」

「うん……じゃあカズくん頑張つてね！　応援してるよ(\*´▽´)

、  
(´\_´)

「おう、ありがとう(\*´▽´)」

いや～和みますなあ～……なんか心が浄化されていくようだ……

「た・ち・ば・な・くん！」

「うわっ!?!」

と、僕がここがみんながいる車の中だということを忘れて普段の家の中の僕のような

緩み切った顔をしていると、突然紗季さんがばああ!　つと僕の顔の間に現れた。

「橘くん、今さつきから何してたの?」

「え!?!」

「いや橘めっちゃにやけてたぞ、あ!　もしかすると女か?」

ギクーーーーー!　や、ヤベーーーーー!　

「お、おおおおんな?!　た、橘先輩!　誰ですかそれは!」

「お、おおおお落ち着け三葉!　違うから!　女じゃないから!」

女です。ぼつりぼり彼女です。

「……へえ橘くん、女、いたんだ」

「い、いいいいい、いないいない!　こんな僕にできるわけないだろ?」

できてます。ふつとに彼女います。

「まあ、確かに橘くん、彼女できそうにないかもね」

「そうか?　案外こういうやつにこそいるんじゃない?」

「ど、どどどどういうことですか橘先輩!」

「い、いないって!　よく僕のことを思いだして!　できると思うか!?!」

……あ、これみんないるって答えるパターンじゃ……

「確かにできないかも」

「できないな」

「……できない、です」

……一回泣いてきてもいいかな?

そうして僕は、残りの時間この三人からみつちりと今さつきのことを根掘り葉掘り聞かれ、

結局僕が、セクシーなグラビアを見ていたということ、このくだらない騒動に決着がついた。

……いやどうしてこうなった。絶対先輩のせいだろこれ。

そしてイベント会場に着いてからも、紗季さんに笑われ、三葉に引かれた目で見られていたのは

もはやそうならざるを得ない、至極当たり前の結果だった。

それからのイベントは、意外にも楽しく面白いものだった。

今回のイベントは大きなステージ上で、イベントに来てくれたお客さんと一緒に様々な

ミッションをクリアしていこうというような内容のイベントだった。

イベントでは二チームに分かれてのチーム戦で、チームは斉藤先輩と三葉のチーム、

そして僕と紗季さんのチームの二つで競われた。最初は簡単な問題なのだが、後半からは

ミッションの難易度がめっちゃ上がってお客さんの力を借りながらでないとかリアできない

ミッションが多かったので、案外熱くなれてお客さんも楽しんでいたので良かった。

……ちなみにこれは完全な余談なのだが、勝負の結果僕と紗季さんチームが勝ったのだが、

なぜか先輩たちとお客さんの悪ノリで僕が罰ゲームをする羽目になり、コップ一杯分の

栄養たっぷり苦みもたっぷり青汁を飲まされたのはさすがに面白いとは言えなかった。

……い、いじられキャラなんかじゃないんだからな！……ほ、本当だからな！

「それではおつかれさまでした〜！」

「「「おつかれさまでした！」」」

イベントも無事終了し、イベントの主催者である如何にもお偉いさんから劳いの言葉も

承り、僕たちはすっかり疲れ切ったまま事務所の車へと乗ってい

た。

「いや〜それにしても今日は楽しかったね〜!」

「ホントホント! マジで橘の罰ゲーム面白すぎっしょ!」

「す、すみませんでした橘先輩! 斉藤先輩が絶対面白いからって……それで」

「も、もういいよ三葉、大体のことは察せるから」

「ほ、本当にすみませんでした!」

「いいよいいよ、それにしてももうこんな時間なのか……」

「あれ? まだ七時半なんだ、思ったより早く終わったんだね〜」

「あ、じゃあさ! 今日この後飲みに行かぬ? まだ時間あるし!」

「あ〜いいですね! 三葉ちゃんも行くでしょ?」

「は、はい……私も、まだ時間はありますし」

「おうじゃあこれからみんなではあ〜つと行くか!」

「あ、すみません。僕は今回パスで」

「「ええ〜!」」

「うわ!? な、なんですか……」

「橘も行くうぜ〜つれないぞ〜このこの!」

「ちよ、ちよつと先輩、暑苦しいから離れてください!」

「ええ〜橘くんも行くうぜ〜」

「紗季さんまで……今日はこの後めっちゃ大事な用事があるんでいけません」

「めっちゃ大事な用事……ですか?」

「あ、ああ……」

「もう〜じゃあ今回は仕方ないね」

「う〜んそうだな〜橘いないといじるやついないし」

「いや僕いじられ要員!」

……と、僕は至って普通を装っていたが、実はとうとちよつとだけ緊張している。

早く家に帰って希に会いたい……会って頭なでなでして猫ごっこして猫ごっこして

猫ごっこしたい。どうしよう猫ごっこしかしてないぞ。



「じゃあおつかれさまでした!」

「「おつかれさま(です)!!」」

車も事務所に着いて、僕は斉藤先輩たちに挨拶をするや否や、それはもうびつくりするぐらい

ダツシユで今帰っています。え、僕こんな早かったの？

まあ、今日は希に色々と思いことしちゃったからな……希も今頃ソファで体育座りしながら

待ってるんじゃないかな？ いや、それはさすがにないか。

ああ、早く家に着かないかな〜!

僕は走りながら、これから希と何するかめっちゃ妄想するのであった。

……ちなみに九割猫ごっこしか思いつかなかったのは内緒。

僕どんだけ猫ごっこ好きなんだよ。

休日出勤はもう嫌だ。

「……………遅い」

時計の短針が七時と八時の間ぐらいを指し、長針が数字の六のところを過ぎたころ。

私はカズくんがいつも座っているところのソファで、体育座りしていた。

「七時には帰れるって……………言ってたじゃん……………」

カズくんのメールを見ながら私はあ…………と、思わず深いため息をつく。

「もうすぐで……………一緒にいられなくなるのに……………」

そう。私とカズくんは、明後日からの一週間一切会うことなく過ごすことになるのです。

……………。

無理だよ！絶対無理だよ！ カズくんに会いたいよー！

一週間？ 一週間も会えないの？ もう私耐えられないよ…………

！

カズくんに一日会えないだけでちよつとだけ泣いちやう私が一週間も会えないなんて

私はどれくらい号泣すればいいんだよ……………！

……………まあ、それは置いておいて。

私が明後日からの一週間、この家を離れるのはある大事な仕事があるからだ。

その大事な仕事とは……………ズバリ！ アイアルの初全国ツアーなのです！

……………まあ、実際は全国じゃなくて関東地方とかそこらへん回るだけなんだけどね☆

でも、このイベントは本当にアイアルの大きな転機になると思っっている。

地下アイドル時代だったころは、私たちを見に来てくれるお客

さんも、ほんの十人くらい

しかいなかった。だけど、コツコツコツ地道に活動を積み重ねてきて、

やっとメジャーデビューして、そして初めてこんな大きなチャンスを掴むことができた。

だから、このツアーは絶対に成功させないといけないし、それとは別にもう一個絶対に成功

させないといけない理由がある。

……カズくん……：…一歩でも近づけるように。

カズくんは、いつも私の前を歩いている。初めてカズくんが主演キャラを演じると聞いた時、

私は大喜びした傍らで、少し焦りもあった。

……私は、カズくん置いていかれないかな？

カズくんが有名になっていくのは、本当に嬉しかった。私はカズくんの努力を誰よりも

知ってるからカズくんが出演したアニメが好評だったり、カズくんのキャラが人気になって

カズくん自身がみんなに知られるようになって、本当に誇らしかった。

だけど……私はどうなんだろう？

まだまだ無名のアイドルグループで、去年やっとメジャーデビューしたようなグループで、

私はカズくんのようにみんなに元気を与えてるのかな……とか一人になったときに時々考えてしまう。

こんなこと、絶対にカズくんには言えないよね。

……はやく、カズくんに会いたいな……

た、例えば……正義のヒーローみたいにカズくん呼んだら来ないかな？

カズくーん！ 助けてーん！ みたいな。

それで巨大化してヒーローもののコスプレしたカズくんが街中で

登場したらどうしよう。

この人私の彼氏なんですなんて言えないよ！ ていうかそもそも誰にも言えないよ！

「カ、カーズーク……ん……」

は、恥ずかしいっ！ ていうか私何やってるのー！

もうバカバカ！ カズくんのバカーー！（これはカズくんがいけないのです。）

でも……本当にカズくん……遅いな。

「………バカ」

そうだ。カズくんが七時に帰れるって言ったのにもう一時間くらい遅刻してるカズくんが

いけないんだ。作った晩御飯ももう冷めちゃうし。カズくんには会えないし。

甘えられないし。カズくんに会えないし。カズくんに会えないし。

……もう、カズくんが帰って来ても無視しよ。うん、それがいい！  
彼女との時間を守れないいけない彼氏さんには一度痛い目に遭った方がいい。

うんそうだ！ きつとこうすればカズくんも遅刻が減って……

「ただいま！」

「!？」

え!! か、カズくん？ 本当に？ でも、声的に絶対にカズくんだ。

あ、走ってこっちまで来てる音がする……む、無視だよね、絶対に反応しちやいけないんだからね。

「ただいま希！」

「………」

う……沈黙が重いよ！ 本当だったらすぐにそっち行って抱きしめたいのに〜！

で、でも、これはカズくんのため。カズくんのため！

「………希？」

「………」

……カズくんの顔が見れない……どんな顔してるのかな？

もう……そろそろやめようかな、カズくんよりも私の方がはるかにきつかったし。

と、私が無視をするのをやめてカズくんの方に顔を向けようとした時。

「ごめん、希」

そう言っつて、私の耳元で囁くと、そのままカズくんは私を押し倒してきた。

「ど、どどど、どうしたのカズくん!？」

事態の進行が分からず、私は思わず噛みながらカズくんの方を見やる。

そこには、若干を汗をかいているのか、顔は赤くなっており息もはあはあと荒々しい。

もしそれが興奮によつてだったら私も幻滅だけど、カズくんには絶対にならないことだ。

だったら……なんで？

「希……ごめん、遅くなって。七時には帰れるつて言ったのに、帰れなかった」

「……………」

「もともと今日は希と一緒にいる予定だったのに、一緒にいれなくてごめんな」

「……………」

「だから……今日はずっと一緒にいよ？」

そう言っつて、私を優しく大きく包み込むカズくんの腕は本当に安心感があつて。

その暖かさも、感触も、ずっと待ちわびていたもので。

とろけてしまうような感覚になるのは、もうこれで何回目だろう？

「カズくん……」

「ん？」

「……………」

だから、私は無言のままそつと目を閉じて、わずかに唇を尖らせる。カズくんはそれを見ると、ふふつて甘い苦笑いをしてそつと唇を合

わしてくれる。

「……チュツ……これでいい？」

「……………うん」

「あれ？ ダメだった？」

「……………もつと長いのが良かった」

「そ、そうか……つ、次の機会に善処します……」

「……………ん」

本当に、何で次の機会について逃げちゃうかな〜カズくんは。今でいいのに。

でも、それがカズくんらしいと言えばカズくんらしいのかも。

「じゃあ、一緒にイチヤイチャする前に、晩御飯食べよう！」

もう僕お腹ペコペコで倒れそうだよ」

「え？ もう食べてきたんじゃないの？」

だから遅くなったんじゃない……」

「な訳ないでしょ。彼女が作ってくれたご飯より美味しいご飯はないから」

……だからさ。そうやって天然でそういうかつこいいこと言うのやめて。本当に。

私がデレデレになって面倒くさくなるぐらいベタベタしても……知らないから。

「じゃ、じゃあ……食べる……？」

「おう！ 希の料理だ〜！」

嬉しそうにするカズくんをよそに、私はちよつとだけ恥ずかしくなっちゃって、

あまりカズくんの顔を見れなくなったのはみんなには内緒にしときます☆

それからというもの……

「希〜ほら、こっちおいで」

「にやー！」

「お〜えらいね〜、わしやわしやわしや」

「ん〜！ にゃ！」

「おあ!? どうした？」

「髪わしゃわしゃしすぎると髪がぼっさぼさになっちゃう！」

「髪がぼっさぼさでも大丈夫！」

「ん〜！ わしゃわしゃわしゃわしゃ！」

「おあ!? やったな？ ほれっ！」

「にゃあ!? お腹触らないでっ！ 気にしてるの！」

「へ〜？ 気にしてるの？ ぷにぷに」

「にやつ……もう、カズくんッ！」

「あはは、ごめんごめん！ 怒るなって！」

「もう、カズくんなんか知らない」

「悪かったって。ほら」

「………ふん、ちよつとだけだからね」

そう言つて、カズくんの腕に埋まる私も大概だなあ……

ご飯を食べ終え風呂も入り終わり、こんな感じはずっ〜と  
イチヤイチヤしてた、

私とカズくんでした☆！

嵐の前夜は甘々です。

「カーズーくんっ！」

「……ん？ どうしたの希？」

「遊ぼっ！」

今だかつて、こんなかわいいおねだりがあっただろうか。

いやないだろう。多分ない。絶対ない。あつてはならないのです

！

……少々荒ぶってしまったが、まずはこの状況を説明しよう。

まず僕と希はソファに座っていて、僕は今度出演するアニメの原作のラノベを読んでいる。

そして希はというと、今さつきソファに座っていると云ったが、これは少し語弊がある。

具体的に言うと、ソファに座っている僕の膝の上に女の子座りしながら座っている。

しかも、顔を僕の方に向けて、だ。

つまりは、僕が本を読んでいる時も希はその本を上から見るように読んでいたり、

僕がちよつと読むのを休憩するとすぐ胸に頬をすりすりしてきたり、端的に言ってしまうえば

希が可愛すぎるだけなのだが、それはもう昔から知ってたことなのでそこはスルーしておく。

そして今さつきのおねだりなのだが、休憩が終わり再びラノベを読み始めた僕に希がちよつかい

をかけ始めてきて、それでも僕は屈しないと最初は無視してラノベを読んでいんだが、だんだん

ちよつかいに反応し始めてしまったら希が一気に嬉しそうに笑顔になってしまつて、

結局そのままずるいってあのセリフが放たれたのだ。

……いや可愛すぎでしょ。

こんな笑顔を他の男に見せようもんなら僕が何が何でも阻止して



やる。

なぜなら間違はなくその男が希のことを獣のような眼差しで見てもあらぬ妄想を繰り広げるからである。

そんなこと絶対にさせないからな！……絶対絶対させないからなっ！（涙目）

と、言うわけで。今日はもう夜中の九時で、明日からいよいよ待ちに待った全国ツアーに

参戦する希のことを応援するという名目で今日は希の好きなようにやってやろう。

「おう！　じゃあ何するんだ？」

「うーん……特に考えてなかったや……えへへ……」

「そうか、じゃあ猫ごっこでもするか！」

「えー？　昨日もやったじゃん！　今日は違うのがいい！」

……な、なんだと？

ね、猫ごっこが……拒否されただと……！

これは大緊急事態が起こってしまった。あの希が、猫ごっこを拒んだのだ。

これはきつと何かあったに違いない。そうでもなければあの希が猫ごっこを拒むはずがないんだ！

……あ、ちなみに言つとくと希が猫ごっこを拒む割合は約五十パーセントくらいです。

「じゃあ何するんだ？」

「んー……なんか夢中になれるものがないな」

「夢中になれる、か……じゃあ映画でも見るか？」

「うう……それは今度の家デートの時間がいいな、今日は映画に集中できそうにないし……」

「ん？　今日はなんだって？」

「あうっ、な、なんでもないってば！」

……今日はどうやら希の様子がおかしいですね。

これにはいくつかの証拠というか理由というか色々あるので少し聞いてくださいお願いします。

まず第一に、希が猫ごっこを拒んだこと。先ほど五十パーセントの割合と言ったが、これは僕が

何の突拍子もなく言ったときの割合だ。僕があの時猫ごっこを誘ったのは、その時希が僕に

ベツタリだったからである。猫ごっこをするとき、希は大体デレデレのふにやふにやになって

しまうのだが、それは猫ごっこを始める以前にその状態だと、希は約九十パーセントの割合で

猫ごっこをやる。

つまり、僕は希がベツタリだったため希に猫ごっこを推奨したのだが、希はそれを拒んだ。

これすなわち、希の様子がおかしいと言える第一の手がかりだ。

そして第二に希が今さっきの映画も拒んだ後の最後の一言。

あの時はつい何だった？っとさも鈍感系主人公のように聞いてしまったが、僕はある時の希の

声をはつきりと聞いていた。というか僕が希の言ったことを聞き漏らすわけが……ないこともない。

ま、まあそれはさておき。希のあの時の、「今は集中できそうにないし……」という言葉。

あれは多分、今何か考えている、あるいは悩んでいるからそんなことを言ったのだろう。

普段は何も考えていない（至って誉め言葉）希が、今は何か頭の中でモヤモヤとするものがある。

これも希の様子がおかしいと言える第二の手がかりだ。……では、希の様子をおかしくしているものは何か？

ここで彼女の悩みが分からない彼氏は彼氏失格だ。伊達に希のことをずっと見てきた彼氏じゃねえぜ！

……希のことは見てきたって言うのは別に物理的な意味じゃないからね？ いや物理的なんだけど……

まあ要はつまり……

「なあ、希？、こっちおいで」

「え?」

「ほら、いいから早く早く!」

「う、うん」

恐る恐ると言った感じで希は僕のもとまで来ると、僕はできるだけ優しく、大きく、温かく、

希のことを包み込むように抱きしめた。

「カ、カズくん……?」

「希、実はさっきからライブのことでもう頭がいっぱいなんだろう?」

「え、ええ!? カズくんなんでそれを!」

何故犯人が私だと分かったの?! と言わんばかりのテンションでそう言う希に思わず笑みがこぼれる。

大体最初からベタベタしてきた時点で予想はしてたんだけどな。

まあ、ここまでできたらとことん希のことを落ち着かせよう、絶対成功させてほしいし。

「カズくん……何で分かったの?」

「ん? 希のことならなんでもお見通しだからな」

「……もう……カズくん大好き」

「おう……僕も希が大好きだよ」

「……うん、知ってる。私もカズくんのことお見通しだから」

「お? じゃあ希は今僕が何を思ってるか当たられるか?」

「うんっ! 私のこと!」

「……不正解……じゃない……」

「ほら! それで私の何のことを考えてたんですか?」

「……絶対。絶対に希たちのライブが成功するだろうな……っつて」

「え……?」

「ずっと見てきてたからな、希のこともアイアルのことも。初めてアイアルに出会ったときは、

本当に大丈夫かって思うくらい頼りなかったし、歌も正直うまくなかったし、ダンスもそこまで

だったのに、今じゃファンもたくさんいるし、ツアーも始まるし、あの時のアイドルでは

想像つかなかったな」

「……そう、だね」

「それと同じように、希も成長したよな」

「わ、わたし？」

「ああ。初めて会った時もそうだったけど、本当に人見知りでこの子がアイドル？って思ってた」

「……そうだったね、初めて会った時も……」

「だーけど、希は本当にかわいくなった！」

「え、ええ!? カ、カズくん？」

「最初は自分の皮がむけずにグループにも馴染めずについてずっと涙流してた泣き虫の希が、

今じゃファンもたくさんいる立派なアイドルのぞみひめになった」

「……カズくん」

抱き合ったまま、僕が言いたかった思いの丈を話して、希も今さっきよりはずいぶんと落ち着いた。

ふう……このまま行けば、明日のライブでも成功間違いなしだな！

……だから、ちよつとだけ。ほんのちよつとだけ、独り言を言おうかな。

「だから、希がライブの時……ちよつとだけ嫌だ」

「え？」

「ちなみに言う握手会の時はもつと嫌だ」

「カズくん？」

「さらに言うライブの後の握手会と撮影会はもつともつと嫌だ」

「……カズくん」

これは独り言だ。別に希に向けて言ったことじゃないし、言ったところでも何も解決することじゃない。

しかも、そもそもアイドルという生き物は恋愛なんてものは御法度だ。

だからそのアイドルと付き合ってる僕がこんなことを言うのは筋違いだというのは分かっている。

だけど……やっぱり彼女が、知らないところで何かされてないかとか、変な奴に触られたり、

撮られたりしてないかとか、頭の中で思ってしまうことは言うまでもない。

「カズくん……大丈夫だよ」

「……うん」

「私、カズくんが思ってる百倍くらい、カズくんのこと好きだから」  
「……そりゃ困ったな、僕は希が思うより千倍希のことが好きだけど」

「ああ！　じゃあ私は一万倍好き！」

「じゃあ僕は十万倍好きだ」

「じゃあ百万倍！」

「お？　じゃあ僕は千万倍だ！」

こうやって、子供たちがするようないやり取りも希とだったら心地の良いものでしかなくて。

「カズくん、そろそろ歯磨きして寝よ？」

「そうだな、明日から忙しくなるもんな、希は」

「うん！　カズくんのおかげで、明日からのライブも楽しめそうだな」

「お、そりゃ良かった」

こうやって、何気ない会話でも笑って話せる時間も心地の良いもので。

「じゃあお休み、カズくん」

「うん、お休み」

「明日も同じ時間に起こせばいい？」

「いや、明日は希が起きる時間に起こして」

「うん、分かった！」

お休みを言うのも、こんなに幸せにできる希だったら、アイドルになって大正解だな。

明日のライブ、僕も行きたかったけど仕事があるんだよなあ……チクシヨー！

でもまあ、希たちだったらきつと楽しくやるだろう。

隣でもう寝息を立てている可愛い彼女のことを見ながら、僕ももう明日に備えて寝よう。

……そう思ったが、体は正直なもので、希の頬にちゅつと触れ合うだけのキスをして、

僕は自分の布団に入った。

……ああ、恥ずかし。

嵐の始まり。

「カズくん！ もう少してライブだ(´ω`)ノ」

「もうそんな時間か、希ガンバレ！」

「うん！今日は初日だから特に頑張らなくっちゃ(´・ω・`)」

「僕も行きたかつんだけどな……」

「カズくんは忙しいんだからお仕事しないといけないでしょ(´∨`」

「うん……ライブどんな感じだったか終わったら教えてね」

「うん！今日は何時くらいにお仕事終わりそう？(´・ω・`)ノ」

「大体夜の十時くらいかな」

「じゃあその時間帯にカズくん電話するね(≡◇≡)」

「あんまり夜遅くまで起きてていいのか？ 体休めないと疲れ取れないぞ」

「大丈夫！カズくんと話していると疲れ吹っ飛んじゃうから(´?▽?」

「分かった、じゃあ希からの電話待ってるね(´?▽?)」

「うん！そろそろ電源切るね？」

「おう。思いつきり楽しんでおいで」

はあくううう！早くカズくんの声聞きたいよ！

……つて、初日からこんなだったら一週間じゃ持たないじゃん！……持ちそうにないけど。

それでも、電話も隠れてすれば問題ないし、結果的にカズくんとは話せるからそれだけでもいいかな！

「のーぞーみん？ さつきから何見てニヤニヤしてんの？」

「うう!? 美衣ちゃん!?!」

「さつきからなーに見てたの?」

「な、なにも見てないよ!」

「えくホントにく?」

そう言っつて、いじわるそうに私を見ながら笑うこの子の名前は  
なかさとみい  
中里美衣。

私と同じAグループで、同じ時期にこのグループに入ったこともあつてプライベートでも仲がいい。

ちなみにファンからはみーみーというあだ名で親しまれてて、私は美衣ちゃんつて呼んでる。

「それよりのぞみん！ もうすぐでライブが始まっちゃうよ！」

「あ、そっか……私まだちよつとだけ緊張してるかも……あはは」

「自己紹介ちゃんと言える？ 大丈夫？」

「も、もう！ ちゃんと言えるつてば！」

「ちゃんと大きな声で言わないとダメだからね？ のぞみん人気あるんだからしないと……」

「わ、わかつてるから！ だからそんなお母さんみたいなこと言わないですよ！」

「のぞみんの、お母さん……ありがも」

「もう！ ふざけないで！」

本当に、美衣ちゃんはいつもお母さんみたいに私を扱うんだよね。

まあそれは私が頼りないからなんだけど……けど、美衣ちゃんのおかげで少しは落ち着いたかな。

それに……

「えへへっ」

携帯の写真欄のお気に入りところに保存してるある写真を見て、私は思わず頬を緩めます。

カズくんとのツーショット。

全然豪華なものじゃなくて、家のリビングでカズくんが私と自撮り風の写真を撮ったもの

だけど、私はこれを見るといつも安心するような気持ちになる。

なんというか、カズくんも隣で一緒にいるみたいなの、そんな感じになれる。

だから……本当にカズくんの隣にいれるような彼女に……絶対に



なるんだ。

今回のライブを絶対成功させて、カズくんに一歩でも近づけるように頑張るんだ！

「みんな〜一回集まって〜！」

リーダーであるりんりんが大きな声で言うと、私たちは一斉にりんりんのもとに集まって、

慣れた動作で円陣を組む。これがアイアルのライブ前の気合の入れ方だ！

「今日からの一週間は、きつとスケジュール的にも辛いと思う」

りんりんがいつもの明るい声とは違う、アイアルを束ねるリーダーの声で淡々と話す。

「でも、こんな大きな舞台上で歌って踊れるってまたとないチャンスだと思う」

静かに頷いて、私も二度とないかもしれないチャンスと思い、あの人の顔を思い浮かべる。

笑ってる顔、怒ってる顔、拗ねてる顔、泣いてる顔、いじわるするときの顔、真剣な顔。

全部の顔が愛しくて、本当に私はカズくんのこと大好きなんだなって思う。

だから、絶対にこのチャンスを掴みとりたい、アイアルのみんなで。

「じゃあみんな！ 準備はいい？」

円陣の中心にいるりんりんはそう言うと、息を思いっきり吸って、人差し指を天井に向けて。

「今日は思いっきり楽しもうっ！」

「「おう！」」

そうして、私たちのアイアルのライブが始まった。

「おつかれ〜」

「ありがとーカズくん！」

「ずっと希がハマしてないか心配してたよ〜」

「もうく私もやるときはやるよ〜！」

「おくそりや頼もしいな〜」

「ふふくん、そうでしょ〜！」

今私は、絶賛顔を緩ませながら、ホテルのロビーにあるトイレの中にいます。

え？ 何でトイレの中で顔を緩ましてるのって？

そりやもちろん！ カズくんとの電話中だからです！ あく久しぶりだなくカズくんとの電話。

まだ同棲してなかった頃は毎日電話してたけど、さすがに同棲してからは電話してなかったし、

仕事場とかで変に電話すると私が大体何かやらかしそうだし。

だから、今日はカズくんとの久しぶりの電話に少々テンションが上がっています。

それに、テンションが上がっているのもう一つ理由があつて……  
「でも、良かったな。ライブが大成功だったらしいじゃん！ ネットに書いてあつたよ」

「そうなの！ ライブ会場が万人くらい収容できるくらいの広さ  
なんだけど、その一万人が

埋め尽くされて外でも聞いている人もいて熱気がすごかつたんだあ  
〜！」

「へえ〜すごいな、曲も盛り上がったのか？」

「うん！ 新曲も盛り上がって本当に楽しかった！」

そう！ なんと、今日のライブ……大・成・功・しました〜！

初日だったからライブ会場も収容人数は少ないと思つてたけど、まさかの超満員でもうビックリ！

歌もファンの人たちと一緒に盛り上がれて、アンコールもしてくれたり、今までのライブの

中でも 一位、二位を争うほどの盛り上がりを見せた。

「それにしても、希はちゃんと自己紹介できたのか？」

「ああ！ カズくんも美衣ちゃんみたいなこと言う！ ちゃんときたよ〜！」

「確かに美衣さんだったら言いそうだな」

「むうー……カズくん美衣ちゃんとあまり話したことがないのに……！」

「あの時に話したからな、なんというか希のお母さんみたいな人だったっけ」

「なんで私は娘なの！」

「僕も希のことを甘やかしすぎると希がお嫁にいけなくなっちゃうかもな」

「むむむ……大丈夫だもん。お嫁にいけなくなってもカズくんが迎えに来てくれるもんね」

「あつ、あつと、えつ、そ、そうだな……」

……カズくん多分今顔を手で覆いながら照れてるんだろうな  
……まあ私もなんだけどね。

「というか私今さつきすごい発言しちやってた？ あれって軽いプロポーズなんじゃ……」

「や、やつちやつたー……！ プロポーズはカズくんからして欲しかったのに！」

撤回！ 今さつきの発言撤回します！

「そ、それよりだな希！ その……握手会とか大丈夫だったか？」

「え？ 握手会？」

「ああ……ほら、希は人気だし、ちよつと過度なファンとかもいるだろう？」

「あくそれは大丈夫だよ、警備も一応はしっかりしてるし」

「そうか……じゃあ大丈夫か……」

「うんうん、それよりカズくんの方はどうだったの？」

「え？」

「お・仕・事！」

「あく、特に困ったことはないかな、休憩中はいつものメールがなかったからちよつと暇だったけど」

「そつかくでもカズくんも忙しいんでしょ？」

「ううん、希よりは忙しくないかな？」

「……でも、今日はまだ家じゃないんでしょ？」

「うっ……まあ希のいない家に帰ってもやることないからな、仕事を多くしてもらったただだよ」

「あんまり無理しちゃダメだよ？」

「分かっているって、希が頑張っている間に僕がダウンしてたら彼氏の面が立たないもんな」

「うん……」

いつも通りのカズくんの元気な声も、今の私には少し不安になるような声に聞こえた。

でも、そんな不安も打ち消すように、カズくんは優しい声で私に言葉をかけてくれる。

「希の方もこの一週間はきついだろうけど、些細なことでも何かあったら僕を頼れよ？」

「うん……毎日電話するつもりでいるよ？」

「おう、僕もその気だから」

もう……カズくんのそう言うところ、どうにか直した方がいい。絶対。

他の女の子にもああいう返ししたら絶対カズくんのこと好きになっちやうから……

ダメ！ カズくんは私の彼氏さん！ 他の女の子になんて絶対に負けられない……！

「……希？ どうかしたのか？」

「ああ!? な、なんでもないよ？ あはは……」

危ない危ない。カズくんこんな変なこと考えてたなんて知られたら絶対なんか言われちゃう。

「そ、そうか……あ、ごめん希。そろそろ仕事に戻らないと行けなくなつた」

「あ、うんごめんねこんな電話しちゃって」

「ううん、希と電話して今日一日の疲れも吹っ飛んだよ」

「もうくまだ仕事あるんでしょ？」

「まあそうだけどな……希、今日はゆっくり休んで、明日も頑張れ

な」

「うん、カズくんもきちんと休まないとダメだよ？」

「僕は大丈夫だって、じゃあ、また明日な」

「あ、うん、また明日！」

ガチャ。

はあくもう電話終わりか。

まあ、カズくんは仕事があるから仕方がないけど、やっぱり電話  
じゃなくて実際に会いたいな。

いっぱいカズくんを抱きしめてもらって、いっぱいカズくんにごえ  
たい！

「早く会いたいなカズくん」

彼氏としての役目。

「嘘……だろう？」

僕は携帯に表示されてある無機質な字体に、段々と心臓が早くなつていくのを感じた。

アイアルのホームページ。

連日続くライブのことやメンバー達の自己紹介、これからのアイアルの活動予定などが

書かれてあるそれに、重要なお知らせと書かれた欄で、僕は知らず知らずのうちに積もっていた

悪い予感的中したような気がした。

“本日開催されるアイアルのライブに出演予定でした美波希は体調不良のためお休みになります。

当日のお知らせで誠に申し訳ございません。皆様のご理解・ご了承よろしく申し上げます。”

今日で五日目となるアイアルのライブツアーは、ネットなどでのファンの拡散により、

アイアル史上類の見ない盛り上がりを見せていた。昨日も会場満員の大盛況で、ネットでしか

ライブの状況を知ることができなかった僕でも十二分にこのライブがすごいということが分かった。

だから、昨日電話越しに聞いていた希の声の違和感にも、即座に指摘することができなかった。

昨日、希たちのライブが始まってからというものの、希と日課になっていた電話をしていた。

最初はお互いにお疲れ〜って一日の疲れを労って、僕がライブがすごいねって切り出したら

希がライブがこんな感じだったんだよ〜って教えてくれて、そんな

話も終わればどこからとなく

他愛もない話をして、最後は恥かしながらも好きだよとお互い伝えて。

一時間くらい電話でも、希と話していると一日の疲れが吹っ飛んだかのように消えていって、

話してる最中は中学の時に好きな人に必死にアピールしてる男子みたいな感じになるし、

電話がそろそろ終わるころは口にも表情にも出さないけど本当はめっちゃ寂しかったり。

だから、今見てるアイアルのホームページを見た時、僕は自分自身に思わず呆れてしまった。

希が一番大切な彼女だと言ってきたのに、希が辛い時に気づいてやれずに？気に希との

電話を一人で楽しんで、これで希もいい息抜きになるだろうだなんて自分に都合のいいこと

ばかり考えていて、結局のところ希のことなんて何一つ考えられていなかった。

そんな自分に、軽蔑に近いような感情さえも湧いてくる。

昨日の電話で、希はどこどころ咳き込んでいた時があった。しかも、咳き込んでいた時は

かなり辛そうな声音だったし、普通の話している声もどことなく暗い感じがしていた。

理由を聞いてみても、今いるところがほこりっぽいからって言う僕に心配かけさせないように

気を遣ってくれて、そんな希の優しさに僕は安易に溶け込んでしまっていたんだ。

「橘くん、やっほー！」

「うおっ!？」

僕がスタジオの外にあるベンチで色々と考えていると、急に聞き覚えのある声がしてきた。

「紗季さん？ 収録は？」

「今さつき終わったとこ。橘くんももう少しで収録だよね？」

「あ、ああうん……」

「ん？ 今日の橘くん元気ないね、顔も少し暗いし」

「そ、そう、かな……」

「うーん、まあ仕方ないかー最近ずっと仕事漬けなんでしよう？」

「あー、まあ家に帰ってもすることがないから」

そう、希がライブで忙しくしている傍らで僕が仕事もせずに家でのんびりするのも何か違う気が

して、この一週間はほとんど家に帰らず仕事漬けな毎日を送っていた。

希との電話も仕事の休憩時間にしていて、それが終わればまた仕事してみたいな感じだった。

「そんな仕事ばかりだと、体がもたなくなるよ？」

「う、うん……だけど、僕も頑張らないといけないから」

「でも、今までこんな仕事漬けだったことなかったよね？」

「……多分今回が初めてだと思う、こんな仕事だけの一週間」

「どうして急に仕事漬けにしてるの？」

「どうして……か。それは……」

「希に……近づけるように……」

「ん？ 何に近づくの？」

「そうだ。」

希たちがライブをすると決まったときから、僕の中に少しずつ焦りみたいなものがあつた。

昔と比べて、希は本当に変わった。それは、悪い意味なんかじゃなくて、本当にいい意味で。

ファンも瞬く間に増えて、気づけば一人のアイドルとして一人で歩いていけるようになった。

じゃあそれに比べて僕は？ たまたま出演したアニメの役がハマって、こうやって色々な

アニメにも出れるようになったけど、希以上に変わったのか。



変わってない、これっぽっちも。

世間でも、この業界でも、僕の評判は良くも悪くもない中途半端なやつで、一番好きな声優は？

と聞かれて僕の名前が出ることはまずないに等しいくらいの奴だ。どんどん綺麗になっていって、どんどん魅力が増えていって、どんどん可愛くなっていった希に

比べて、僕は何一つとして変わってなかった。

だから変わりがなかった。希がライブで頑張ってる時も、僕も希と同じように頑張ってた。変わった。変わった。

全部……希の彼氏として、恥ずかしくない彼氏になるために。

「おーい、橘くんー！」

「うおっ!？」

「このやり取りもう二回目だよ」

「す、すみません……」

「……何か悩んでる？」

「え……?」

「なんか、今の橘くんの表情辛そうだから」

「辛そう?」

「うん……なんかいつもの元気な橘くんじゃないから」

「いつもの……僕?」

「うん、いつも笑顔で明るい橘くんじゃないよ? 今日橘くんは」

いつも……笑顔……

その時に、ふと希の笑顔が僕の脳裏をよぎった。

……僕は、何をやってるんだろうか。

大好きな彼女が、今頃苦しい思いをしてる時に僕はこんなところでめそめそ悩んで。

僕が笑顔にいられるのはもう……希がいるからなのにな。

僕が変わる変わらない以前に、希がいないんじゃない意味がないじゃないか。

いつもの僕だったら……これからとる行動は、ただ一つ。

「紗季さん、ありがとうございます！」

「ふえ？ ど、どうしたの急に？」

「紗季さんのおかげで目が醒めました」

「そ、そうなの？ 確かに眠そうだったし……」

「じゃあ今から行ってきます！」

「え、え？ ど、どこに？」

「……行ってきます！」

そう言い、僕はその場から立ち上がるとそのままスタジオを出ようと走る。

「ちよ、橘くん!? もうすぐで収録始まつちやうよ!」

「少し遅刻するかもだけど絶対戻ります! ごめんなさい!」

こりや帰ってきたら大説教されるだろうけど、そんなのは今の希のことを思えば軽いもんだ。

でもやっぱり……事務所の社長には絶対怒られるだろうな……

「まあでも……そんなこと言ってられないよな」

何よりも大切にしなれない彼女が苦しんでる時に、彼氏が駆け付けないなんて彼氏失格だ。

彼女が苦しい時に一緒に居て一緒に苦しい思いをして、一緒に乗り越えるのが、

彼氏としての役目だ。

「希、待っててな。今行くから!」

希に届くように呟くと、僕はそのままタクシー乗り場へと走って向かった。

## 彼女の涙。

「ん……」

私が目を覚ますと、視界に広がっていたのは真っ白で届きそうになり天井だった。

おかしいな……昨日まで泊ってたホテルの天井は、こんな真っ白じゃなかったのにな。

それに、もうずいぶんと寝た気もするしそろそろライブの準備しなきゃ……

だけど、私がいくらそうやって頭で思っけていても体が別人かのように言うことを聞いてくれない。

それに、腕についている点滴みたいなのも邪魔で起き上がることさえできない。

早く……ライブに行かなきゃ……

「ああ、美波さん。起きましたか」

「……え……？」

私が起き上がろうと必死に体を動かそうとすると、そこにはこの一週間よく見てる顔の人が、

天然水が入ったペットボトルを二つ持ちながら私の方に歩み寄ってきた。

「あんまり無理しちゃいけませんよ？　美波さんは今病人なんですから」

「びよう……にん？」

「まさか、覚えてないんですか？　今日の朝、突然美波さんが倒れたこと」

「倒れた……私が……？」

正直、その人の言っていることが私にはよくわからなかった。

でも、冷静になって周りを見渡してみると確かにここは病院で、私が病人だということが安易に

決定づけられてしまった。

じゃあ、今頃みんなはライブしてるのかな……私も……行かなきゃ

……

私が体を起こそうとすると、私のベッドの隣に座っていたその人は慌てて私を静止した。

「ちよ、ちよつと美波さん！ 急に体を起こすと危ないですよ！」

「ライブ……行かないと……カズくん……」

「ラ、ライブ？ まさか行こうとしてるんですか!? 今日体調不良でお休みです！」

「ダメ……なの……行かないと……」

「ちよつと美波さん！」

私が後もうすぐのところまで起き上がろうとしていたところを、その人は男の人特有の強さで、

私を元の位置までいとも簡単に引き戻した。

「マネージャーさん……お願いです……ライブに、行かせてください……」

「ダメです。美波さんは今日は体調不良で休むということはもう決定事項なんですよ」

と、持っている黒縁の眼鏡をくいつと上げてやれやれという表情を作っているこの人は、

私たちアイアルのマネージャーである黒澤壮史くろさわ せいしさん。

最近アイアルのマネージャーになったばかりの人で、正直まだこの人のことはあまり知らない。

顔的に二十台後半くらいで、身長も平均くらいな人で……あまりこの人にいい印象がない。

私たちが所属することになったプロダクションからの派遣らしいんだけど、黒澤さんとは

今日初めて喋ったかなというほど普段から話さない。というか話すことがない。

「全く……驚きましたよ、朝食を食べていたら突然中里さんが”のぞみんが倒れた!”なんて

言うもんですから駆け付けたら息を荒くしながら横たわっていたんですから」

「美衣ちゃん……」

「それで、急いでここの病院に連れて行って先生から貧血と疲労のせいだと診断されて、

点滴を打ってもらって今の状況に至る……というわけです」

「……じゃあ、やっぱりライブは……」

「美波さんは体調不良でお休みだと、ホームページに掲載しました」

「……そう、ですか……」

黒澤さんから一連の話を聞いて、私は今まで無意識に入っていた力がすつと出て行くか

のように、ふかふかなベッドの上にとんと横たわった。

今まで……このライブのために、一生懸命頑張ってきた、一生懸命努力してきたのに、

私の体調管理がなってないせいでアイアルのみんなやファンの方にも迷惑かけて……

カズくんの、言う通りだね。

電話ですつと私に言ってきたのに、結果的にカズくんの言葉を無視しちゃって、

こんなことになって……自業自得ってやつかな、カズくん。

「なので、今日は一日中体の疲れをとって安静にしておいてください  
いね」

「……あの、黒澤さんは……ライブに行かないんですか？」

「ああ、社長からここにいろと言われたので」

「……そう、ですか」

「はい……ああ、もうこんな時間ですね。お昼ご飯を持ってきました  
ので少し席を開けます」

「……ありがとうございます」

黒澤さんがそう言って部屋を後にすると、私はとても静かな病室で  
そつと目を瞑った。

目を瞑って見えてくるのは……カズくんのことばかり。

ごめんね、カズくん。

多分、これを言うと、何で希が謝るのって、私のこと抱きしめてく

れるんだよね。

そして、そつと頭を撫でてくれて私のことを全部包み込んでくれる。

だから……ごめんね、カズくん。

私ね、このライブでたくさんのものを欲しがりすぎちゃったみたい。

アイアルの人気も、ライブの成功も……カズくんの、彼女としての隣の席も。

全部欲しくて、結果的に、一つも手に入れることができなかった。

“希は本当に甘えん坊さんだな……”

“希だったら絶対大丈夫”

“久しぶりに希と、その……一緒にいれると思ったのに……”

“……僕も希が大好きだよ”

今までカズくんが私にくれた言葉が、私の頭の中を駆け巡るような錯覚に見舞われる。

でもその錯覚は、決して苦しいものじゃなくて逆に物凄いい心がぼかぼかするようなもの。

カズくん、本当はね？

カズくんには言ってなかったけど、私はこのライブでカズくんに一歩でも近づけるようになって

思ってたんだ。

カズくんが声優のお仕事で活躍しているのは、カズくんの彼女としても、カズくんのファンと

しても本当に誇らしくて、嬉しかった。だから、何もできてない私は、いつか置いて行かれるん

じゃないかなって、不安になってた。カズくんが私のこと置いて行くような人じゃないって

知ってる筈なのに。

でも……立派な彼氏さんの隣にいれるのは、立派な彼女でしょ？

ここで、頬につうつと、冷たいのか温かいのかよく分からない液体

が伝った。

カズくんの彼女に……カズくんの本当の彼女に……なりたいよ……カズくん。

あの時カズくんに助けられたみたいに、私もカズくんのことを助けてあげたい。

カズくんみたいに、慰めてあげたいし、癒してあげたいし、落ち着かせてあげたい。

大好きだよカズくん。

今日は電話もメールもできそうにないけど、許してね。

お仕事最近忙しいそうだけど大丈夫？ 私みたいに体調壊さないようにね？

それとそれと……

ごめんね、カズくん……もうカズくんに会いたくて……仕方ないや。

でもそんなことできないからせめて、夢の中だけでも会いたいな。

「カズ……くん……」

最愛の人におやすみを心の中で言い、私は意識を夢の中へと手放した。

僕が君にできること。

「……はい、では一万円いただきます」

「ありがとうございます」

ここまで運んでくれたタクシーの運転手に礼を言うと、僕は目の前に大きく書かれた看板に目を向ける。

“茨城県立中央総合病院”

思っていたより立派な病院で少しばかり嫌な予感が頭をよぎる。

ホームページには体調不良とだけ書かれていたので自分的には熱くらいかなと思っていたが、

ここに入院しているとなってる以上、そんな軽い症状ではないと見た。

……え？ 何でここに希がいるのか教えろ仕事サボり遅刻魔野郎？

ごめんなさい暴言の部分がほぼ的を射てるので何も言い返せませんごめんなさい。

まあそれは置いておいて、ここに希がいると分かるまでにはかなり手間がかかった。

まず最初にホームページとか希のファン向けのブログとかを見てみたが、

当然の如く書いてなく、次に希にもメールと電話を入れてみたが返信もなく。

どうしようかなと悩んでいると、今日アイアルは茨城でライブを行っているらしく、

かなり荒作業だったが、茨城で有名な病院に片っ端から電話をかけて希はここに入院しているか

と聞いてみて、たどり着いたのがこの病院だ。

正直同姓同名の美波希さんだったらもうここらへんで体育座りでもしてやるぐらいの心の

折れようだが、僕の第六感である希を感知する希センサーがぴこぴここと反応してるので



多分ここで大丈夫だ。

「……それにしても、さすがにこれじゃあバレない……よな？」

そう、僕は今、普段は絶対身に着けないであろう帽子とマスクと伊達メガネを着用している。

ただでさえ仕事をサボって来るというのに、万が一でもファンの方や僕のことを知っている

人に見られてしまったら大変なのでこの変装をしているのだが、はつきり言っつて今の僕はかなり

の変質者だ。通りがかりの人の冷たい視線がさつきからちくちく刺さって来る。

いやしかし、こんなことで挫けてしまっつてはいけない。

僕がここに来たのは、おそらくこの病院で寝ているであろう希に会いに来たためだ。

「よし、じゃあ行くか」

尚も冷たい視線が僕に向けられる中、僕はいち早く、病院の入口へと向かった。

\*\*\*\*\*

\*\*

「それでは、ここにお名前と職業と患者様との間柄を書いてください」

「は、はい……」

カズくん早速話しました。

……いやどうすんだこれ。名前はまだしも職業と間柄は完全にアウトだろう。

でも僕はこんなところで諦めていいのだろうか。

僕の彼女が今も苦しい思いをしているというのに、彼氏である僕が何もしてやれないのか。

……ダメだ！

「はい……では美波様のお兄様の美波一颯様でよろしいですか？」

「は、はい……兄です……」

罪悪感が拭えませんが。本当にごめんなさい受付のおばさん。

本当は声優で彼氏の橘一颯なんですけど、希に迷惑かけちゃいけないから嘘をつきました。

本当にごめんなさい。

「では、美波様は二階の二〇五号室にいますので室内では帽子は取って入ってください」

「あ、はい、わかりました。ありがとうございます」

受付のおばさんに心で土下座ばりに謝りと感謝の意を込めて、僕は一度深く頭を下げる。

そして、頭を上げてもう一回おばさんにぺこりと会釈すると僕は足早に階段を上る。

二〇五号室……二〇五号室……

二階に着いて、キョロキョロと二〇五号室を探していると、割と簡単に発見できた。

ドアの小さな名札には、他の人の名前があるなか、きちんと美波希と書いてあつて希がここに

いてくれて安心したのと同時に、知らずに募っていた不安が今になつて体中を駆け巡る。

この先に、ベッドで眠っているであろう希がいる。

しかし、ドアを開けようと手を伸ばしても得体の知れない怖さみtainなものそれが拒む。

何やってるんだ……仕事をサボってここまで来たんだろ……何やってるんだ僕は……！

僕がもう一度ドアに手を伸ばそうとした、その時。

「何をやっているんですか」

「えっ……？」

不意に僕にかけられた冷たい声音に、僕は条件反射でそちらの方へ体を向ける。

そこには、いかにも不機嫌そうに顔を歪ませた黒縁メガネが、僕の方を睨んでいた。

え、誰この人……ていうかめっちゃ睨まれてる……

僕が十秒ほど固まっていると、痺れを切らした彼は尚も低い声音で僕に言葉を投げる。

「もう一度聞きます、何をやっているんですか」

「え、いやこの病室にいる人のお見舞い……に……」

「……ちなみに、その人の名前は？」

「あ……美波希……ですが」

僕が希の名前を言った途端、彼は突然僕の左肩を強く押しつけて、僕はその強さに耐えることができず、そのまま地べたにしりもちをついてしまう。

もう一度聞きます……え、誰この人。

「早急お帰り申し願います。あなたみたいな人をここに入らせるわけにはいきません」

「えっと……え？　な、何であなたにそんなこと言われないといけないんですか」

「あなたみたいな不審者からアイドルを守るのが私の仕事ですの  
で」

「なっ、誰が不審者だ！」

「見ての通りですが」

そう言つて、黒縁メガネがこちらに手鏡をかざしてくると、そこには深めに被った帽子に

あまりにも似合っていない伊達メガネ、それにマスクという不審者  
三点セットが見事に

合わさった僕の顔が、手鏡の鏡の中に写し出されていた。

ああ……これはヤバイ……

「あなたみたいな人を看過できるほど、私は心に寛容がありません  
ので」

「……そういうあなたは何者なんだよ」

「ああ申し遅れました。私、アイドルアフロールのマネージャーを  
しています、黒澤壮史です」

「……マネージャーが何でこんなところにいるんですか」

「それはもちろん、アイアルのメンバーである美波さんが朝体調を崩したので私もその看病で

行けと上の方から言われたので」

「……じゃあ、所詮は命令されて看病をしているというわけですか」  
「そうですね、それ以外に看病する理由がないので」

「……なんか、直感的だけど。」

僕、この人苦手だ……いや、嫌いだ。

「それで、あなたこそ何者なんですか、こんなところまで来て……  
フアンの面会は禁止ですよ」

「ち、違います！ 僕は、その……希の、兄……です」

「……どうにも嘘くさいですね」

「う、？ なんかじゃ……ない……です……」

「後からどんどん声が小さくなっていますよ」

「っ!? と、とにかく！ こっちはお見舞いに来たんですよ、早くそこを開けてください」

「できません、私のあなたへの認識は不審者に変わりないので」  
くくくく！ この黒縁メガネ……言わせておけば次から次へと

……！

と、僕と黒縁メガネの間に火花をパチパチと散らせていると、そこにとある人が手に何かを

ぶら下げたままこちらへ走ってきた。

……廊下走るの禁止ですよ？ まあ、僕も人のことは言えないが。

しかし、そのとある人は今さっきまで顔を合わせていた、あの人が  
だった。

「美波様！ 申し訳ありません、面会カードを渡すのを忘れていました」

「あ、ありがとうございます……」

「……？ 美波希様の兄の、美波一颯様でよろしかったですよね？」

「あ、は、はいそうです……わざわざありがとうございます」

「いえいえ、礼儀正しい人だなくっと思っっています、面会カードを渡すのを忘れていたと

分かって、急いで渡さないとして」

「ほ、本当にありがとうございます！」

「いえいえ、では失礼します」

そう言って受付のおばさんは来た道を帰っていくと、僕は思わず涙腺がうるうるしてきてしまった。

受付のおばさんいい人すぎる……後でもう一回ちゃんとお礼をしなければ……

「まさか、本当に美波さんのお兄様だったとは……」

それに、黒縁メガネも今を見てだいたい僕の信ぴょう性も上がって来てるっぽいし、

多分攻め時は今しかないな、よし。

「あ、ああそうだよ、だから早くそこを……」

「しかし、やはりどうも信ぴょう性に欠けますね」

どうやら信ぴょう性はこれっぽっちも上がっていなかったらしいです。

「と、とにかく！ 面会カードもちやんとありますし、早くそこを開けてください」

「……………はあ」

「な、なんですか」

「仕方ありません、あの受付の人を信じることにしましょう」

「本当ですか！」

「でも、美波さんのお見舞いは私も同席します。同席というよりは監視、ですがね」

「……わかりましたよ、監視付きでもいいので早くそこを……」

「あと制限時間は十五分までです」

「制限時間も!?!」

かなりのオプシヨン付きになってしまったが、まあやつと入れると思ったら良しとしよう。

ここらまで……長かった……

\*\*\*\*\*

\*\*

「し、失礼します……」

黒縁メガネがドアを開けて、僕もその後が続いて入るとそこには三、四人くらしいの患者さんが

ベッドで点滴を打たれながら横になっていた。

そしてその中の一人に、僕が一番会いたかった彼女の姿もいた。

「……美波さんは今眠っているの、くれぐれも起こさないようにしてくださいね」

黒縁メガネが注意を促してくる。無論、僕も希を起こす気なんてない。

希にはこの機会にでもゆっくりと休んで欲しいと思ってるから。

「希、ひとまずはお疲れ様」

そう言つて、僕は寝ている希の髪を起こさない程度に優しく撫でる。

希が寝ているベッドの隣にある席に座って撫でているのだが、希は寝顔姿もかわいい。

「よく頑張ったな、本当に」

尚も撫でたまま、僕は寝ている希に話しかける。

このライブ、希は絶対に成功させたいと言っていた。成功してたよ、アイアルのライブ。

見れなかったのは本当に残念だけど、ネットとかニュースにはちゃんと良く書いてあったよ。

「ごめんな、希」

だから、謝らせてくれ、希。

気づいてたんだ、希が電話越しでも分かるくらい声音も声色も違ってたってこと。

あの時言っておけば、すぐに電話を終わらせてこんなことにはならなかったのかもしれないのに。

「希は悔しいよな？でも、多分まだ泣いてないだろ？」

希は頑張り屋さんだ。

頑張り屋さんで我慢強い子で寂しがり屋で、そんなもってとつても

優しい子だ。

きつと、大声を上げて泣きたいくらい悔しいのに、自分が泣いちゃダメだって、きつと我慢してる。

「いっぱい泣いていいからな。いっぱい泣いていっぱい泣いて、いっぱい慰めるから」

これくらいしかできないんだ、僕には。

希からは普段からいっぱいいなものをもらっているのに、僕からできるのはこれっぽっちしかない。

「……いっぱい、甘えていいから」

これが僕が君に、できることだから。

「……そろそろです、美波さん」

「……あ、はい……」

黒縁メガネにそう言われ、僕は十五分ずっと撫でてた手を止め、席を立つ。

心なしかどこか満足そうな顔から不安げそうな顔になった希を見て、少しここを去るのが

名残惜しいがこの黒縁メガネとの約束でもあるのでさすがに長居はいけない。

「じゃあな、希」

最後にそう言つて、もう一回だけ頭を撫でると、希はまた満足そうな顔に戻る。

よかった、起きないで。僕今絶対にやけてる……

「じゃあ、ありがとうございました」

「いえ、こちらこそすみませんでした」

「あ、あと黒縁メガ……黒澤さん」

「………何でしょうか」

「僕が来たことは、希には内緒で」

「? 何故ですか?」

「まあ、単に恥ずかしいだけですよ」

「………そうですか……?」

「もし誰か来てたとか言つて来たら、適当に言い濁しておいてくだ

さい」

「わかりました、約束は守ります」

「そこから辺は？み込みが早くて助かります」

黒縁メガネとも挨拶を交わし、僕は希のいる病室を後にする。

その時、希が去り際に言った寝言を、僕は敢えて聞き取らないことに決めた。

「カズくん……会いたいよ……」



## 夢の中の現実。

目を覚ますと、そこはどこか色褪せたような世界が広がっていた。点滴をさしているため、体にあまり力が入らず私は天井を見つめたままさつき見た夢を思い出す。

そう、今さつきまで、私はとつても幸せな夢を見ていた。

カズくんが出てくる夢。

今カズくんは東京でお仕事だから、ここには来れないけど夢の中のカズくんは本当のカズくん

みたいに優しくてかつこよくて暖かかった。

「カズくんとの電話……今日はできないや……」

昨日まで日課にしていたカズくんとの電話も、今日はできそうになり。

そもそも、携帯がどこにあるのかも分からないからカズくと連絡すらできない状態だ。

でも……もし携帯が今あったとしても、今の私にはカズくに連絡する資格があるのかな？

今の私には……カズくに会わせる顔が……ないもん。

もちろんカズくんには会いたい。

会って、できることならそのままカズくんの胸の中で泣いて泣いて泣きまくりたい。

でも、私にはそんなことをすることはできない。

カズくんの隣にいたい、カズくんの傍にいたい、カズくと一緒に歩いていたい。

“私”を変えてくれたカズくにそれに見合うような恩返しをしてあげたい。

「……会いたい……っ……会い……たい……カズくんっ……」

こんなみつともない自分が、私は嫌いだ。

欲しいものを手に入れられずに、その場で泣いてしまう私が嫌いだ。

好きな人の本当の隣の席に座れないカズくんの彼女である私が、大嫌いだ。

「……すみません、失礼しま……って、どうしたんですか美波さん!？」

「ふえ……?」

私が泣きながら自己嫌悪に陥っていると、ちょうど病室に入ってきた黒澤さんが慌ててこっちに

やって来てハンカチを手渡された。

「美波さん……何かあったんですか……?」

「……少し、自分が嫌になっちゃって……それで、気づいたら泣いて……えへへ、情けないですよね」

努めて笑顔で言うのと、黒澤さんは何故か歯を食いしばりながら拳をぐつと握った。

「……そ、それはべ、別に情けないようなことじゃ……な、ないと思います」

「は、はい……? ありがとうございます」

少し様子が変な気もするが、まあ気のせいかな?

そう思い、気を取り直すつもりで隣の机に置いてあったカットされた果物に手を伸ばそうとした

その時に、ふと、懐かしくてとても落ち着く慣れ親しんだ匂いがどこらかとなく流れてきた。

この匂い……カズくん……?」

ま、まさか……そんなことないよ。

だってカズくんは今東京でお仕事頑張ってるし、第一私がこうやって病院で寝込んでいるのか

さえもあやふやなのに、そんなカズくんが来てくれるわけ……ない……よ……

でも、僅かな希望を持ってしまった私は考えるより先に口が動いていた。

「黒澤さん、私が眠っている間、誰か来てませんでしたか?」

私がそう質問すると、普段は冷静で物怖じしない黒澤さんが明らかに動揺した素振りで

慌ててメガネをくいくいと上に直した。

「と、ととととくにお見舞いに来た人は、いいいいませんでした！」

……明らかに、不審だ。

こんなせわしなく髪を直したりメガネをいじったりするような人じゃないのに、

おまけにあそこまでキョどるなんて……絶対何かがある。

「黒澤さん、さつきから何でそんなソワソワしてるんですか？」

「い、いやー！ 別に私は隠し事なんてこれっぽちもしてませんしありませんし！」

「隠し事……ですか？」

「は、はい！ 別に美波さんの兄がお見舞いに来て黙っておいてくれなんて絶対に隠してません！」

……よし、これで黒澤さんが何を隠しているのかは分かった。

だけど……あれ？

「あの……私、兄いないんですけど……一人っ子だし……」

「だから私は何も隠し事を……って、え？」

黒澤さんの時間が止まった。

本当にその表現しか当てはまらないかのように、黒澤さんはその場で静止した後。

「あ、あ、あの野郎くくくくく！ や、やっぱりウソだったのかくくくく！」

怒り狂ったように、黒澤さんは顔を真っ赤にして叫び出した。

え？ 今何が起こってるの？

「く、黒澤さん？」

「あ、あいつ……やっぱり兄を装ってアイドルに気安くベタベタ触ったドルオタ鬼畜不審者だ！」

「誰ですかそれ!？」

「いやあ、美波さんが寝てる間、あなたの兄と言ってここに見舞いに

来た輩がいたんですよ」

私の……兄……ここに……来た……

私には兄がいないし、そもそも兄弟というものがいない。だから、兄が来たというのは絶対おかしい。

絶対おかしいのに……なぜか、私は一切の不安や恐怖が湧き上がらなかった。

「ちなみに……その人の名前……は？」

「ああ？ ああつと確か……」 美波かずと「……って言ったか？」

てかあいつは美波じゃない！」

……一瞬で、私の何かを押さえていたダムみたいなものが、決壊してくような音がした。

「カズくん!!」

「うお!」

「黒澤さん! その人、いつまでいましたか!」

「え、えつと……確か十分前に帰ったと思いますが……って、美波さん!」

もう、立ち止まれなかった。

まだ、間に合うはず。

点滴のやつを強引に抜いて、私は今までの人生で一番かじやないかというほどの速さで、

病室を抜け出す。

「み、美波さん! ちょっと待って!」

黒澤さんの声も、廊下を走る私を訝しげに見る人たちの目も、もう眼中になかった。

私の兄なんかウソついて、お見舞いに来て、しかも黒澤さんに黙らせて。

こんな……こんな人……こんな優しい人、一人しか知らない!

「カズくん!!」

もう絶対、後悔したくない!



## 嵐の終幕。

「はあ……これからどうするか……」

病院の外に設置してあるベンチにて、僕は一人背中を猫背にして深いため息をついた。

空は青空から少しずつ赤みがさした色に変わってきており、風のアたりも涼しくなってきた。

「……これ、どうしよう」

今まで切っていた携帯の電源を入ると、そこには不在着信がおよそ100件、メールとかが500件

に遡るほど来ており、そのどれもが今僕がどこで何をしているのかをお怒りたつぷりで問うてる

ものだった。もうマネージャーなんか完全に激おこなご様子だ。

まあただでさえ声優という一人欠けると関係者の人たちに多大な迷惑をかける仕事を無断で放り

投げて来たので、怒っているのは至極当然のことだが、まさか事務所  
の社長までもがメールして

きていたのは本当に心臓が止まるかと思った。

しかし一通りメールを読んでいくと何故か後半からは全く怒っておらずむしろ僕を心配する

ようなメールが多くなっていた。どうしてだろうなとさらにメールを読んでいくと、

どうやら紗季さんが僕のマネージャーさんや他の声優さんたちに？の根回しをしてくれたらしい。

紗季さんマジできるキャリアウーマン。

ということでのこの件に関してはまだ全然解決してないけどひとまず置いておいて……

「希、大丈夫かな……」

そう。そもそもわざわざ仕事を放り投げてきてここまで来たのはそれを確かめるためだった。

あいにく希は寝てたから寝顔だけで確認したけど、はつきり言つてあの寝顔は普段希が風邪を

ひいて熱を出したときと同じような息苦しい表情をしていた。僕が髪を撫で始めてから

少しずつ表情が和らいでいった風に思ったけど、正直不安でならない。

本当は……希に僕がここに来てたよつて言いたかった。

僕が苦しい時にいつも一緒に居てくれた希みたいに、僕も一緒に居たかった。

少しでも、希が元気になれるように僕が元気づけたかった。

いつも……希がしてくれてきたように。

でも、希は多分、僕がここに来てると知ったらきつと迷惑をかけたと思つて無茶するだろう。

無理に元気がつて、僕を安心させるだろう。心配かけさせないように、強気に振舞うだろう。

そうして結局希に無理をさせたら、それこそ本末転倒だ。

だから黒縁メガ……黒澤さんに黙つていてくれと頼んだ。

僕がここに来てたと知ったら……希が無茶するから。

「そろそろ帰らないとな……」

いくら紗季さんが根回ししてくれたとはいえ、みんなに迷惑をかけたのは確かだろう。

早くスタジオに戻つて謝らないと……

そう思い、腰かけてたベンチから立ち上がった、その時だった。

「カズくん!!」

聞こえるはずがない、聞き慣れた声が後ろの方から僕の鼓膜に響いた。

振り返ると、そこには患者とは思えないほど汗をかいて、患者服も乱れ、靴やスリッパも

履いていない裸足の、だけどそれが目に入らないかのように美しく

見えた……

希がいた。

「希……?」

「カズくん……カズくんっ……カズくっくんっ!」

「ちよ、希?! 何でここに? って、え!」

カズくん大パニックである。

最初から涙目だった希が、僕を確認するや否や思い切りこっちめがけて飛び込んできて、

僕がすんでのところで抱きしめると、希は一瞬でリミッターが外れたように泣き始めた。

泣いている最中も、ずっとカズくん、カズくんと言って強く強く強く抱きしめ返してきた。

「の、希? どうしてここに?」

「……っひっ……っ……カズくんが……ここにいたから……っ……」

「いやそう言うことじゃなくって……何で僕がここにいるのが分かったんだ?」

「……っひっ……黒澤さんに……聞いた……」

あ、あ、あ、あの野郎~~~~~! やっぱり言ったのか!

ど、どうしてくれようか黒縁? ダルマメガネ……今度会ったらただじゃおかんぞ……

「そ、それに……カズくんの……匂いが……っ……したから……」

……黒縁? ダルマメガネ……希の可愛さに免じて許してやろう。

ていうか、今更気づいたけど、希ここまで来て……大丈夫なのか?

「希、どうやってここまで来たんだ?」

「んっ……抜け出して……きちやった」

「っ!? ダメだろそんなことしちや! それに希は今は患者さんだぞ!」

「……ヤダー!」

僕が希に説教に近いものをしようと思ったら、今まで胸の中に顔を埋めていた希が上目遣いで



子供の様な勢いでヤダ！つと言ってきた。あれ？ 説教は？

「カズくんがここに来てくれてるって知って、絶対絶対カズくんに会わなきゃって！」

カズくんにお礼も言えてないし……それに、カズくんに話したいこともある……から」

「話……？」

一体何の話があるのだろうか？

久しく会ってなかったから近況報告とか？ でもそれだとこんな必死に追いかけてるのに矛盾

するような……

僕が希を抱きしめたまま頭の中で何のことか考えていると、希は一度深く僕の胸の中で

深呼吸すると今さっきまで泣いていたのがまるで嘘かのように真剣な眼差しになった。

「あのね……笑わないで聞いてね？ カズくん」

「う、うん……どうしたんだ？」

そう前置きすると、希は今まで抱き合っていた状態を解き、手を胸の前で結んでまるで

今から好きな人に告白するように、一言一言丁寧に言葉を紡いでいく。

「私、今までカズくんに隠してたことがあったんだ。カズくんには直接言えなくて、言ったら

きつとそんなことないよって優しく抱きしめてくれると思ったから、ずっと言えなかったけど……

今なら……違う。今だから、カズくんに全部話したい、話そうと思っただの」

今まで見たことないような希の表情に、僕は目を逸らせず、じつと希の方を見る。

「カズちゃんと初めて出会ったのって、今から二年半くらい前だよ。たまたまカズくんが

主人公役のアニメの主題歌にアイアルが抜擢されて、それでそのア

ニメのイベントで会ったんだよね」

ああ……懐かしいな。

まだ僕が新人だったところに、主人公役選ばれてまだその時は右も左も分からないような奴

だったけど、あのアニメは個人的にすごい印象に残ってる。

あのアニメのおかげで、希に出会えたからな。

「それで、そのアニメのイベントで私たちがライブしたときに私失敗しちゃってさ。

まだアイアルに入りはじめだったってこともあるけど……

単純にアイドルを分かってなかったんだと思う。

失敗した後も、中々切り替えられずにさ……先輩や当時のマネージャーにたくさん叱られて……

私本当に悔しくて……悔しくて……ステージ裏で泣いててさ」

……ああ……僕たちの初対面だったよな。

「その時に、カズくんが来てくれてさ。」どうしたんですか？」って言うてきてくれて、私その時

たくさん泣いてたからお化粧とかもダメダメで、初めて会った人だったから

全然喋れなかったのに、カズくん……私が泣き止むまでずっと隣に居てくれたよね……

私の泣き顔、他の人に見せないように」

「……そうだったっけ……そこら辺は、よく……覚えてないかも」

さすがに僕がここまで覚えてたら恥ずかしいから、ここは見栄を張って嘘をついところ。

「そうだったよ？ その時からカズくんは優しくてさ……私が泣き止んでお礼を言った後にさ？」

“ライブ、本当に良かったです。お互い失敗しても諦めずに行きましよう！” って言うてくれて。

あの時、本当に励みになったんだ……」

とても嬉しそうにそう言う希は、本当にアイドルらしい可愛い顔をしていた。

「それからカズくと色々あって、付き合い始めて、同棲し始めて……本当にカズくと一緒に

歩んできた日々は、本当に楽しくて愛しくて素敵だった」

「……僕もだよ、希」

？偽りない、そう断言できるほど僕が希と過ごしてきた日々は充実してた。

「だから……私、内心すごい焦ってたんだ」

「焦ってた？」

「うん、カズくんは声優さんという素敵なお仕事で、どんどん有名になっかっていって、カズくんの

苦労とか知ってる私には、本当に誇らしかった。だから……不安だったの」

不安……？

「いつか……カズくん置いて行かれるんじゃないかって……カズくんの彼女としての席が

私じゃなくてカズくんみたいにもっと立派な人が座るべきじゃないかって……

ずっとずっと不安だった」

「希……」

「だからね？ 私がもっと立派なアイドルになって、このライブも成功させてもっと有名に

なれば、本当のカズくんの彼女としていられるって思ったの……」

だから……ここまで無茶してきて……

胸の中にかみ上げる熱い何か、僕の体を支配する。

希は僕のために、そこまで思っただけで頑張ってきた。

バカじゃないのか……希が彼女じゃなかったら……もう誰もいないよ。

「希」

「……はい、カズくん」

話し終えて、すっきりしたのか希は今まで通りの希の表情をしていた。

それに加え僕は今、だいぶ真剣な顔をしてるんだろうな……

「僕からも、一ついいか？」

「……うん、何？」

言うんだ……希に。

「僕も、本当は希に焦り感じてたんだ。どんどん良いように変わっていった希に比べて、

僕は何一つ変わってないって。僕も確かに変わりたい、変わってもっと有名になって、

好きな声優は誰って聞かれたら、橘だって言わせてやりたい。けど……変わるとか変わらない

とかじゃないんだよ……僕がいつも頑張れるのは、笑顔でいれるのは……

希が、居てくれるからだ」

「カズ、くん……！」

そう言うと、希は心底驚いたように、そして嬉しいように、大粒の涙を伝わらせる。

この涙が、悲しいものじゃないくらい僕にもわかる。

だから、今はただ希を抱きしめてやろう。

「これから二人で一緒に頑張って行こうな？」

「……うん！」

「これからも、よろしくして……いいよな？」

「……うん、これからもずっと、ずっとよろしくされたい！」

「そうか、じゃあ希……目、瞑って」

「あ……んっ……」

この可愛い僕の彼女に……これからの誓いにと、そっと口づけを交わし、

そして太陽は静かにゆっくりと沈んでいった。

嵐の余波と甘々。

「カッズくーん！」

「おう、おかえり、希」

「ただいまーカズくん！」

私はリビングに急いで駆け付けると、そこにはソファに座ってアニメの台本を眺めていた

カズくんが、私に優しい笑顔を覗かせておかえりと言ってくれる。

ああ……幸せだ……

だから、私はつい甘い甘えたくなって、そのままカズくんのところにダイブする。

「うおっ……希？　いつもケガするかもしれないからダイブはやめようなんて言ってるだろ？」

「えへへ、カズくんは早く抱きしめてほしかったんだもん！」

「つたく、言ってくればすぐ抱きしめてやるのに……」

そう言つて、カズくんはダイブした私をそっと抱き寄せると、そのままぎゅゅと私を優しく

抱み込んでくれるように抱きしめてくれる。

ああ……疲れた体に染みるぜえ……

「そう言えば、今日はファンイベントどうだったんだ？」

「ん、特に変わったことはなかったかな……あ、でも！　ファンの人は前より増えてた！」

そう。

今日私は、アイアルの月に数回あるファンのイベントに参加してきたんだけど、やっぱり

全国ツアーの影響というものは侮れないもので、以前より軽く三倍くらいファンの方が来てくれた。

いや、全国ツアー恐るべし……まあ、実際は関東ツアーなんだけだね！

まあでも、全国ツアーが終わってから今日までカズくんも私も色々あったなあ……

全国ツアー中に私が倒れて、それでカズくんがわざわざお仕事をサポートして来てから、

私は何とか全国ツアーの最終日に参加することができた。本当は一週間は入院してなきや

いけなかったんだけど、黒澤さんに何とかお願いして二日で退院できちゃった。

でも、やっぱりアイアルのメンバーのみんなや、事務所の社長さん、それに最も黒澤さんに

迷惑をかけたのは確かで……社長さんには病室を勝手に抜け出したことも含め結構怒られちゃった。

でも、ツアーが終わってからは体調を崩すことなく今もこうやって元気に活動している。

それもこれも、全部カズくんのおかげなんだけど……

そのカズくんは、私以上に相当社長やマネージャーから怒られたっぽい。

無断で仕事をサボってきちゃったことはもちろん、何の連絡も入れなかったことだったり、

他にも他の声優さんにも迷惑を掛けちゃったことで、カズくんが物凄い悲壮感漂う顔で帰って

きた時は今でも覚えてる。本当だったら、カズくんはこんなことにはならなかったのに……

私がそんなことを思っていると、カズくんは突然私の頭をチョップしてきた。痛い！

「うー！ も、もう……何するのカズくん！」

「ん？ 希がちよつとだけブサイクになってたから可愛い顔に戻してあげた」

「あ〜！ 彼女にブサイクって言ったくらいいけないんだ〜」

「ははっ、だって本当に希ブサイクだったから」

「もうう！ ブサイクブサイク言わないでよ！ 私もアイドルなんだよー！」

「じゃあアイドルはあんな顔しちやいけません」

そう優しく諭すカズくんは、私を少し私を強く抱きしめる。

「まぐたあの時のこと考えてたでしょ？ 別に気にしないでもいいって言ってるのに」

そうやって、私の考えてたことを意図も容易く見抜いてくるカズくんは本当にズルい。

何がズルいかと言ったら、それはもうズルズルでズルズルにズルいのだ。

「気にしてはないよ？ ただその、思い出しちやっただけ」

「ん……まあ、もうそのことに関しては何も怒ってないから大丈夫、なはず」

「本当にごめんね？」

「それはもう聞き飽きたから僕にこれ以上ごめんは通じませくん」

もう……カズくん好き。大好き。

どうしようかな……カズくんの好きが、最近ドンドン大きくなってく。

私はカズくんの背中に手を回すと、カズくんの顔の方に体をよじ登らせていく。

やがて私の顔とカズくんの顔が至近距離になると、私はカズくんの唇めがけてその距離を

ゼロ距離にする。

「っ……んん……あ……っ……」

お互いの悩ましい音が静かな部屋に響き渡る。

最近、ちよつとキスする頻度が増えてきたような……変わらないよ  
うな……

そんなことを思っていると、カズくんは私の両肩を持って優しく押し返す。

「希……最近キスよくするようになったけど、どうしたの？」

「っ、べ、別にそんなことない！ キスされるの……イヤ？」

「い、いやそう言うことじゃなくて！ その……恥ずかしいなく、なんて……」

珍しく……もないけど、顔を赤くしてそう言うカズくんは普段の  
かっこいいカズくんとは違ってた

どこか子犬を連想させるような可愛いところがある。

かっこいいとかわいいを持ち合わせたカズくんはまさに最強だ！

「でも、希はアイドルなんだからほどほどにしとけよ？」

「え〜アイドルとプライベートは全然違うじゃ〜ん！」

「プライベートでなんかやらかしたらアイドルに響くだろう……」

「んーでもでも、カズくんとの時間は絶対なくしたくない！」

これは私の本心だ。

例えば仕事でいくら疲れてても、時間が遅くても、失敗しても、絶対  
カズくんとの時間は作る。

私にとってカズくんとの時間は、幸せと感ぜられる貴重で希少なひ  
と時だ。

仕事でうまくいったときは一緒に喜んでくれる、失敗したら精一杯  
慰めてくれる。

そんな人がいれるだけで私は頑張ろうと思える。

だから、カズくんとの時間は絶対になくしたくない。

「……俺も一緒だよ、希」

「カズくん……好き！」

そう言っつて私はもう一回カズくんとキスする。

ああ……何かこれ、ハマっちゃうかも……

そう感じさせるくらい、カズくんとのキスは甘い。

「希、その……」

「ん、なに？」

カズくんはキスを一旦中断させると、少しはにかみながらも優しい  
表情で、

「大好きだよ、希」

今日一番カズくんにドキツとした、そんな瞬間でした。



久しぶりの休日。

「んん……まだこんな時間か……」

重たい瞼を半分くらいまで開けて、僕は頭上にある目覚まし時計に目を向ける。

時刻は七時十五分。

うん、休みの日なのに早く起きすぎちゃった☆

そう、今日僕はとても久しぶりの一日休日だ！

声優の仕事では、良く午後からとか午前だけとか、かなり仕事時間の振り幅があるんだけど、

今日はアニメのアテレコもなくイベントもないので、超久しぶりの休日だ。

希の件で無断で仕事をサボって以来、僕はなんとしてでも遅れや周りの評判を取り返すべく、

とにかくここ一週間は死ぬ気で働いた。

いや～さすがに体力の限界だったね、こんなに働くのは。

社長から直々に説教(二時間近く)を受けて以来、ホントに必死だったからここ最近のことは

仕事のことぐらいしか覚えてないけど、まあとにかく何が言いたいかというと、

やつ　と　……　休　み

だーーーーー

ずっと待つてたよ、休みちゃん。

君が僕のもとに来てくれて本当に嬉しいよ。大好きだ、休みちゃん。

……え？　さすがにそれはマジで引くからやめろって？

うん、僕も最初の行で気づいてた。

まあ茶番は置いといて、さっきも言ったかもしれないが只今の時刻は七時十五分。

世間から見たらこの時間帯は果たして早いのか遅いのかは分からないが、僕的にはこの時間は

休みの日にしては早く起きすぎってしまったと思う時間帯だ。

普段だったらこのまま二度寝して十時くらいまで寝るところなのだが、今日はそう言う訳にも  
いかない。

ん？ 何でかつて？

それはですね……

「……すう……すう……すう……」

僕のすぐ隣に、希が寝息をたてて寝顔を見せながら寝ているからです！

いや、僕も最初は早く起きすぎたな……二度寝しようかな……なんて思ってたなら、

すうすうすうつて可愛い寝息が聞こえてきて、まさか……と思いな  
がら横を向くと、そこには

幸せそうに頬を緩まして寝てる希がいたんです！

これはもう寝れないでしょうよ！ これはもう寝れないでしょうよ!! (二回目)

というわけで、僕は今希と体を対峙させるように寝ているわけですが、希は一向に起きる気配を

見せません。さらに言うところ……うふふ……アルパカ……私の……ふふつ……」なんて寝言を

言ってるじゃありませんか！ というか希よ、希は一体全体どんな夢を見ているんだ……

まあ真剣に考えていくと謎は深まるばかりなので、思考するのはここで一旦中断しよう。

「のーぞーみーきーん、起きないんですかー」

ということ、僕は今から希にちよっかいを出すことにしました。いや、どういことだよ僕。

まあ声をかけたくらいじゃ希は起きないので、希の両頬をぷにぷにしてみる。

うーん、やっぱりさすがは希、頬に対してもケアを忘れない……

予想以上に頬がスベスベしててぷにぷにしてたので、僕のテンション

ンはアゲアゲである。

あれ、なんか楽しいぞ？　しかも希起きる気配が一向にないし……  
続けよう！

「のーぞーみーさーん」

今度は希の頬を軽く引つ張ってみる。むにいくつと。

「つ……うんん……すう……すう……」

いや、もう本当、何で僕の彼女は寝てる時まで可愛いのでしょうか。  
本当困りますね、主に僕の理性が。

まあそりやアイドルという仕事をやっているから可愛いのは間違いないんだけど、

仕事外やプライベートでも可愛いって反則じゃありませんか。

この“希が仕事外でも可愛すぎて僕の理性が叫びたがっている”  
件についてはまた後程話し合いますよう。

「それにしても起きないな、希……」

さつきからずっと頬をぷにぷにしたり軽く引つ張っているけど全く起きない。

そろそろ頬が赤くなるからやめなといけないんだけど、できれば  
もう少し希にイタズラしたい。

んーでも、希を起こしちゃうと可哀そうだしな………仕方ない。  
い。

今日はもうこれで終わって、今度やるゲームキャラのセリフでも覚  
えるか……

と、僕が希のそばから離れようとする、ふと僕の足元の裾に希の  
手が握られているのが分かった。

「掛け布団と間違えてるのかな………よしよつと」

希の手をそつと解いて、布団をかける。

希も今日は休みっぽいので、しっかり休みを取ってもらいたい。  
そしてもちろんイタズラしてたことは隠ぺいするつもりだ。

「コーヒーでも淹れるかなつと………ん？」

今度こそ立ち上がろうとすると、今度はさつきの逆の足元の裾が握  
られていた。

ん？ 何かおかしいぞ？

希の顔は布団で半分覆われていて表情は窺えないのだが、本当に寝ているのだろうか。

確認しようとして、僕が布団をそつと持ち上げた、その瞬間。

「あまいよ……カズくん」

寝言ではない、確かに意識ある声が、僕の目の前にいる目をパツチリと開けた希から聞こえた。

僕は驚きのあまり体を動かさずにいると、希はそのまま上半身だけ浮かせて、

そのまま僕の唇に吸い付くかのようにキスをした。

そして。

「……私のほっぺは触っていいけど、触るんだったら私が寝てる時じゃなくて起きてる時にして。」

そうじゃないと……せつかく甘えてくれてたのに……反応、できないじゃない……」

「え……っ？」

「それに……カズくんとの時間は、ちゃんと二人で一緒に過ごしたい……だから……」

そう言つて、僕の顔に両手を包みこむように添えると、ニコツと微笑んで。

「今日は、いっぱい一緒に休もうねカズくん」

……今日はずっと希を愛で続けよう。

そう決め込んだ、久しぶりの休日の早朝での出来事でした。

ゲーム対決は罰ゲームありで。

「ねえねえカズくん！ ゲームしょー！」

久々の休日。

しかもカズくんも同じ日に一日中休みなんて、一年で十回あるかどうかの確率だ！

そんな久しぶりの休日に、今私とカズくんはソファにぴったり隣同士で座っていて、

カズくんはブラックコーヒーを飲みながら、私は特に何もせずただこの居心地の良い空間を満喫していた。

このまま何もせずはこの幸せな空気を吸っていても良かったけど、どうせなら何かしたいな〜

と思つて、最初のあの言葉に戻る。

「ゲームか〜……最近やってなかったし、久しぶりにやってみたいかもな〜」

「お〜！ やろうやろう〜！」

カズくんも意外とノリ気だったみたいで、何やら手首を回しながら準備運動をしている。

カズくん……ひよつとしたら私よりもノリノリかも。

よくし、私も気合入ってきたぞ！

「と、その前に希」

「ん、何？」

私もカズくんと同じく手首の準備運動を真似ていると、カズくんが何かいい悪戯を思いついた

子供の様な顔で私の方を見てきた。

はあ……全く、今回はどんな悪戯を思いついたの？

「希、今からこの“スマッシュシスターズ”で三本勝負して、負けた方が罰ゲームってルールにしない？」

「罰ゲーム〜？ またカズくん変な罰ゲーム思いついたの？」

「変なのじゃないよ……僕が考えた罰ゲームは、

“もし希が負けたら昨日先輩から借りたこのホラー映画と一緒に

観よう！」です！」

「ううー私がホラー苦手なの知ってるくせに〜！」

「いや〜やっぱりホラー映画は二人で見るもんでしょ〜！」

「……カズくんも怖がりなくせに……」

「う、うるさい！ そ、それで希はどうするの？」

うーん、罰ゲームかー。

そもそも私ゲーム系の操作が苦手なんだよね、誘ったの私だけ。だから勝率ははるかにカズくんの方が高い。

とすると、私は少し度が過ぎた罰ゲームでも大丈夫なわけだ。

カズくんにももらいたい罰ゲーム……あ！

「私の好きなどころ……十個耳元で囁く、で……」

「え、えっ!? なんかレベル高くない!？」

だ、だって……してもらいたいんだもん……

それに、カズくんが私のどんどころが好きか……知りたいし？

別に耳元でカズくんにも私の好きなどころ言われて超ドキドキなんてしないし？

これは罰ゲームだから……そう罰ゲーム！

「だってカズくん私よりゲームうまいじゃん！」

「まあそりゃ希よりはやってるけど……そんな大差はないよ?。」

「あるよ！ ありあり！ それに……嫌だったら勝てばいいじゃん！」

「別に嫌ってわけじゃないけど……まあ分かったよ、じゃあ罰ゲームも決まったしやろうか」

おーカズくん私の罰ゲームに乗ってくれた！

それに、別に嫌ってわけじゃないって……！！

こ、これは絶対勝たなければ！

「じゃあゲーム起動するねー」

そう言うと、カズくんは電源ボタンを押して、私にリモコンを渡してくれる。

今からやるゲーム、大乱闘スマッシュブラザーズは色々なゲームキャラが自分の分身として

選べて、相手と戦うゲームだ。もう結構昔のゲームだけど、今やつても全然楽しめるし

面白いからこのゲームは好きだ。

「じゃあ俺はゾニツクにしようかな。希はどのキャラにするの？」

「うん、私はカーピイかな。可愛いし！」

「よし、じゃあ3ストック制で、アイテムはスマッシュボールだけでいい？」

「うん！ かかってこいカズくん！」

「おう！ レッツスタート！」

1戦目終了。

結果：勝者カズくん

「もう〜〜！ カズくん強すぎ！ ていうか必殺技が強すぎるよ〜！」

「ふっふっふ、ゾニツクの強さをなめてもらったら困るな」

「私も必殺技打ちたかったよ〜……」

「ははっ、じゃあ二戦目行こうか。僕はキャラ変えてメタナイドにしよう〜！」

「カズくんキャラ変えるの〜？ じゃあ私もビカチュウにしよう！」

「希、次勝たないとホラーだからね？」

「わ、分かってるよ……あ、そうだ！」

「うん？」

1戦目を終え、私はカズくん操るゾニツクを一回も倒せずに負けてしまった。

次勝たないとホラー映画なのに、多分次も負けちゃう……だから、私は少し卑怯だけど、この作戦で行くしかない！

「あの……希さん？ 何で僕の胡坐の上に座ってらっしゃるのかな

？」

「え、えつとく……ノ、ノリ？」

「いやどんなノリだよ」

「と、とにかく！ 早く二戦目行こうよ」

「待って！ この体勢のままするのか？」

「そうだよ、何か不満？」

「え、えつと……画面見れないしいい匂いするしちよつと色々マズいんだけど」

「ダメ！」

「ダメって……はあ、分かったよ。じゃあこのままでやろうね」

「うん！」

そして……

2戦目、3戦目終了。

結果：勝者どちらも希

最終結果：希の勝ち

「やった〜〜〜！」

「負けた……何で……」

何と勝っちゃいました！

カズくん、途中から全然うまく操作できてなかったらなく。まあ全部私のせいなんだけどね！

ということは……

「カズくん！ ちゃんと罰ゲーム覚えてる？」

「うう……はい……」

「うむよろしい。じゃ、じゃあ……今にでも……いいよ？」

わ、私が緊張してどうするの希！

ここは立場的優位性を保ってカズくんに更なる追い打ちを……と、私が心を落ち着かせようとした時。

「大好きだよ、希」

そうやって、カズくんが私を少し強く抱きしめながら耳元で囁いて



くる。

「可愛いところ、優しいところ、努力家なところ」  
カズくんは、すごく落ち着いた声で、ゆっくりと言葉を紡いでくれる。

「おつちよちよいなところ、泣き虫なところ、甘えん坊さんなところ」

私のダメなところも。

「いつも一生懸命なところ、いつも明るいところ、いつも笑顔なところ」

全部受け入れてくれるカズくんが。

「そして……僕のことを好きでいてくれるところ」

「カズくん……大好き」

本当に、大好き！

この後……

「あの……希さん？」

「ふっふーん♪ にゃ〜」

「さつきからホラー映画観れないんだけど……」

「私はカズくんのこと見てるよ！」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

「ホラー映画より、カズくんのこと見てた方が楽しいもん♪」

「はあ……まあ、これはこれで悪くないかもな、ふふっ」

「あぁ〜カズくん何で笑ったの〜？」

「いや、別に？」

「ぶうー！ 教えて教えて！」

「わあ!?! こら、希！」

二人仲良くくつつきながらホラー映画を観たカズくんと私でした。